

信ちゃんの昔話 第三部

毒蛇と移民

沼田信一 著



移住して蛇で死んだちや情なか

信ちゃんの昔話（第三部）

毒蛇と移民

沼田 信一 著

はしがき

沼田 信一

話は話している内は良いが、文章にすると批判されるものだ、と注意を受けて、心配しながら出版した事であったが、第一部では日本に持つて行った人からブラジルでは日本語化している、レイテ（ミルク）とかカザメント（結婚式）というような言葉でも、そこそこで日本語の訳を入れておく方が良いとの注意を頂いた。

なる程本となると、初めは日本迄送る考えはなかったのであるが、私自身も日本の親戚知人に迄贈りたいという事になり、又、日本から注文をしてくる人も何人か出てきたので第二部からは注意をしたつもりであります。

又、第三部はムダンサ（引越し）と移民と題して原稿は出来ていたのですが、内容が、ロンドリーナの個人の記事に

片寄っているくらいが有りましたので、第四部として書いてありました毒蛇と移民を第三部として発表する事にしました。

ブラジルに渡ったら広大な原始林の開拓にかかるのだという事で、猛獣の心配をしていたのであるが、来て見ると、そうした、ライオンや、虎とか、又、北梅道に未だにいる熊の様な怖ろしい獣は居らず、豹（オンサ）がいるのであるが、この動物は人に姿を見せる事は殆んどなく、従って危害を加えられたという事はまず聞かないのであった。

従って怖ろしい物と言えやはり毒蛇であった。血清注射が間に合うと殆んどが助かるのであるが、やはり命を取られる人も居るのであった。

その毒蛇が今でも居るので、油断は出来ない。

移住した当初は、ブラジル迄来て、蛇に噛まれて死んだのでは余り情けない、そんな事になりたくないと思いながらも度々、ヒヤツとさせられる場面には行きあつたものである。

そこで表紙の川柳らしいものが出来たのである。

従ってブラジル移民を語る時には毒蛇の問題も忘れてはならないものの一つである。

刈った稲を脱穀の為に集めているとその稲の下に大きな毒蛇がいて驚ろいたり、コーヒーを植える時、畠に二十×三〇に二十センチ程の深さの穴を掘って種を植えて、乾燥を防ぐ為に五〇センチ位の木の枝や、或はヤシの木を切って、それを割ってふたをして置くので、そのふたを時々あけて崩れた土やゴミを取り除いてやるのであるが、時々その穴の中に太

い毒蛇が入って休んでいるので驚ろかされたり、又、噛まれた人もいる筈である。

とに角、移民で畠で働いた人は殆んど毒蛇で肝を冷やす思いをしているであろうかと思うのである。

そうした事を思いながら此の本を読んで頂ければ幸いです。思うものであります。

目 次

装幀と漫画 牛島襄

はしがき

第一話 毒蛇と移民

第二話 毒蛇をまたいだ父

第三話 毒蛇の生け捕り

第四話 毒蛇・……

第五話 再び毒蛇：

第六話 卵・……・

第七話 毒蜘蛛（くも）

第八話 雨を降らす木

第九話 恐ろしい物

第十話 詐欺（サギ）

第十一話 詐欺（サギ）続

第十二話 お産（1）

第十三話	お産（2）
第十四話	アサイ街道
第十五話	私の最後（1）
第十六話	私の最後（2）
第十七話	せんべい焼き
第十八話	霖雨・（なが雨）
第十九話	運動会……
第二十話	殺生……
第二十一話	相互扶助……
第二十二話	サントスより植民地へ
第二十三話	サントスより植民地へ
第二十四話	国際植民地の草分け
第二十五話	コロンバタイ地方視察
第二十六話	娘見て心臓止る
第二十七話	先見の明
第二十八話	自然のセルベージヤ（ビール）
第二十九話	振るまい酒
第三十話	デルバ マットと風

あとがき

第一話 毒蛇と移民



ブラジルに来て一週間もしない内に、海岸山脈のパラナピアカーバの大原始林の麓であの大森林の中に一寸見に入って迷ってしまった親子三人でマツチもなくて火を燃やす事も出来ず、こちらの事情不明にて助けられるまで淋しい怖ろしい思いをした事があったが、その事は第二部に発表してあるので省く事にして、その内にブラジルの原始林には、ライオンや虎、又北海道に多くいた熊などのような猛獣は殆んどいなく、時にオンサ（豹）が居ると言うものの殆んど人の眼につく事は無かった。

又、時にはタマンドア（蟻食い）に行きあうとその強い

前足でひどい目に会うという話はあったが、動作のにぶい動物で、此方がうつかりぶつからなければ、むこうからかってくるという事はなかった様である。

結局恐ろしいのは何んと言っても毒蛇であつた。

これには命を落した人や、命は助かつても相当に苦しめられた人もいた。

毒蛇が恐ろしいのは何も開拓する時の原始林だけにいるのではなくして、何十年たった古い畠にもいるので油断がならないのである。

此方ではどうしても川べり迄きれいにして置く事も出来ないし、又、大方の家で牛を飼うので牧場があり、そうした処でも繁殖するのであろう。

又、近頃サトウキビ栽培が多く、私の土地の殆んどがそうであるが、サトウキビ畠も蛇の暮しには絶好であるから、既に数十年の古い土地であるが未だに時々毒蛇に驚かされる。

さすがに労働者達も経験を積んだのか、咬まれるという事件は殆んど聞かなくなった。

どこかで既に書いて重複するかも知れないと思うのですが、毒蛇は自分の毒に自信が有るからか、人が近付いても逃げず、反対に尻尾の先をふるわせて、俺が居るぞと知らせるのである。

従つて此方の仕事に慣れてくる頃には、一生けんめい草取りに精を出していても『アッ！ 近くに蛇がいる』と、気がつく様になるのであるから慣れるとは有難いものである。

然しその慣れる迄にそれ相当の被害を受けているのであ

る。私たちの植民地でも一人の大事な主婦が医師の手当を受けながら気の毒にも亡くなった。

此の婦人は、パラナの有名人で日本政府から勲四等の追加叙勲迄受けられたアサイの故頼則照雄氏の母堂であつた。ロンドリーナの中央区に入植して二年目位の早い時期に川辺で洗濯をしていて、後から、かかとのへんを唆まれたとの事で、医師の手当を受けながら残念にも絶命された。その報が伝わると、植民地一同愕然としたのであつた。

十年を目当に帰国する希望のもとで開拓にはげんでいた時、蛇に唆まれて命を落されたという事は、お互に、我が身につまされて、ブルブルツと全身に寒けが走る思いであつた。

私の妻も結婚してみると片足の外側のクルブシの処にやけどの様なキズ跡が有るので、聞いてみると蛇に咬まれた時の物だという。咬まれるとすぐに、病院に連れて行かれたのだそうであるが、血清の利きが悪かったのか、ヒザの辺まで毒が廻って、膿をもったので、毎日のように治療し、三週間位入院してやっと治ったらしい。

移住してきた当時は経済は苦しいし、何とかして帰国したいし、蛇にかまれると、急いでそこを刃物で少し切つて毒を吸い出すというような荒療治をしたという人にも行きあつた。

ところが、その内に此方も慣れてきて、その毒蛇を『うまい』といって食料に、又強壯剤に良く利くと、これを利用し

た。強壯剤には、皮をむいた蛇を、乾燥してからよく焼いて粉にして飲んだものである。重労働で汗が目に入って困る時、これを飲むと汗が目に入らないのは、やはり効果があるのだ、とは父が良く口にしていた事である。

人によつては皮をはいですぐ焼いて食べるとおいしいと言う人もいたが、蛇は香ばしいものであつても肉の少ないものである。

元氣の良い人は生きているのを大きなビンに入れてピング（焼酎）漬けにして置くと、そのピングが最高の強壯剤だといつて作っている人も居た。

然しその作り方を聞くと誰にでも出来る仕事ではなかったらしい。

始め生きた蛇をビンに入れて針金でしっかりと蛇の出ないように口を塞いで、その中に水を入れて腹にある物を全部出させる。勿論何回も水を取替るのである。

そしてその後が大変らしい。即ち腹にあつた物をきれいに出した後に水とピング（焼酎）の入れ替えをするのであるが、ブラジルの蛇はおとぎ話の『やまたのおろち』のように酒が好きでなく大変苦しんであばれるそうで、若しビンの口をしつかりしておかないと大変なことになるとの事である。口がしつかりしていれば、間も無く絶命するらしく、その時にはきれいにとぐろを巻いて死んでいくとの事であつた。なる程、ピング漬の蛇はどこでもきちんたとぐろを巻いていた。

さてそのピングが大変に良い強壯剤だという事であつた

が、私は見た事はあるが飲んだ事はない。とぐろを巻いた蛇が入っているので気持が悪い。

傑作は毒蛇の皮の利用である。誰が考えたのか、近所の人にその信者？　が出来て、吹出物・切りキズ等にあの気持の悪い毒蛇の皮を四センチ角程に切って貼って置くとかよく利くというのである。一寸ぬらして貼っておくと、よくひつついて落ちず、落ちた時には治っているというのであったが、私の家では信用もできず実験もしなかった。

或る時、それを信用する近所の奥さん、三十才余りの夫人が、そのひたいにおできが出来たとて、あの独特の気持の悪い模様の毒蛇の皮をペタリと貼って来られたが、利くとは言つても一寸行き過ぎた姿であつた。マンガにかいてもらつたら面白いかも知れない。

『毒蛇と移民』 此の話題も、ブラジル移民を語る時、よけて通れないものと思うのである。

とにかく何がなんでも日本に帰りたいと思つていた渡伯当初であるから、落雷や蛇に噛まれては死にたくないと思つたのは私だけではないと思う。

その気持が表紙の川柳？　に表れていないか知らん。

” 移住して 蛇で死んだぢや 情なか ”

” 帰郷まで しんではおれぬこの命 ”

川柳になっている、いないは別として、そんな事で死にたくはないと思つたものである。

第二話

毒蛇をまたいだ父

日本から植民地に着くと直ちに自分の土地に入ったのであるが、当時の移住には大きく分けて移民と、植民とがあった。移民とは一般の移住者で、引受人に雇われて義務農年を果して自由人になる。植民とは、幾らか日本政府の関係する植民地に土地を買って入植する者であった。私の家では、私たち子供が農業の経験もなく、又力仕事の経験もないので一般労働者としては体力が持たないと心配した父が、植民の方を選んだのであった。如何にジャングルが大きくとも、ボツボツとやっていれば幾らかずつは拓いてゆけると考えたとの事であった。

それでも何も全面積ジャングルの畠に入る義務は無かった。というのは、植民地であるから半分開拓して売り出す人もある。大勢の中には働き手が病に倒れる事もあり、仕事を取り替えた人も居たので二・三日は視察をして歩き、夜になると植民会社の事務所に集つては、此方の事情を係員から聞いたものであるが、その時、植民地の地図に、植民地の一番奥のロッテ（地区）の尚十乃至二十km奥と恩われる辺に一本の線が画かれていたので、此の線は何かと尋ねると将来の鉄道予定線で、あなた方が今残っている一番奥のロッテに入ると云う事は、将来鉄道に一番近い事になるのだとの説明

であつた。

それを聞いた父達は北海道の開拓地で鉄道や道路のつく事で、その地方が急に発展する事を度々見ているので「よしきた、そんなら一番奥を私がもらう」と、父が決定すると、その手前を下富良野から来た大西信太郎氏、その手前を十勝の芽室からきた加藤一郎氏、その隣りを虻田郡から来た宮崎徳治氏、その隣りを十勝から来た遠国寿治氏と同航海の北海道出身者が、奥五地区を決定したので会社側は大喜びであつたろうが。人をだまして喜ぶ様な淋しい考えではだめだ。これが半年もしない中に、此の五家族が因でセツテ・バーラス植民地は急坂を転げる様に破滅に向うのであつた。然しその事情は又別に書く事にして、ペンを本題に戻す事にする。

七月末に到着した私たちの一行は時期的に一日も早くデルバ・マツト（原始林の伐採）に掛らなくては時期を逸するのである。

全面積マツト（原始林）である。相当の木が地力よりも多雨の為に繁茂しているので自力だけでは間に合わないのです、それぞれ半分位を請負師に任せ、自分でもデルバ（伐採）するのであつたが、半分ブレーション（湿地）なので地下タビ等もすぐ腐つて破れる。又地下タビの横から激しいトゲの木が有つて刺さるのには閉口する。

それに又蛇がチョイチョイいるのである。猛毒のウルツも良くいるので、ウツカリ出来ない。それに湿気が多いのでか木の枝の上にも良くいて、足元に気を付けて働いていると、「オイッ、頭の上に蛇がいるぞう。」と注意される事が

チヨイチヨイあつた。

入植して間も無し、植民地と言つても一般の入植者とは五^キロ余も離れている上に忙がしいので連絡する事もせず^ロにいた時代であつたから、蛇の血清注射などにも気の付いていない様であつたが危険な事をしていたものである。

或る日、請負師の旧移民古木氏に所用あつて私と見が父に従いて出かけて帰り道、マツトの中の小道での事である。日はトツプリと暮れていたが、良い月明りで道はかなりはつきり見えていた。四・五メートル先の父が振り向いて、「そこに木の根があるからつまずくなよ」と、注意をしてくれたし、私たちも注意しながら歩いているので判つたが、言われて尚良く見ると、それは木の根では有つたが、その根に添うように毒蛇が一匹道を横切ろうとしているのであつた。「蛇だ」と私が叫ぶと、父も後の兄もびっくりして、「どこだどこだ。」と言ひ言ひすかして見ると蛇は静かに道を木の根にそつて渡つて行こうとしている。かなり太いウルツである。急いで木の枝をさがしてきてたたき殺してしまつたが、怖ろしい思いであつた。注意した父は何の気なしにまたいでいたのであるが運が良かったと喜んだものである。

開拓者とはこの様に後で思い出しても寒けがする様な事に良く出会っているものである。

第三話

毒蛇の生けどり



入植して誰もが一番心配したのは、毒蛇にかまれることであつた。

パラナにきてからは割合に早くから各地に日本人会が組織されて、毒蛇の血清注射などは共同購入して準備されていた。

この血清は、いわゆるサンパウロ市にあるブタントン毒蛇

研究所の製造で、毒蛇を送れば血清をくれるという事だったので、その為に蛇の生け捕りをする道具として、首を絞めて捕える二メートル程の柄のついたものと、二匹ずつ入れる箱を取りよせて用意してあった。

毒蛇が見つかったら道具と箱を持って来る間、誰かが蛇の見張りをしていなければならない。

然しその時には先輩の経験で、木の切れ端か、土の塊りでもなんでも良いから蛇の近くにポンと投げっておけば、蛇はそれに敵意を持つのか、三十分位はそれを見つめていて動かないと教えられていたが、それは事実で、私が見つけた場合もその通りにしておくと兄と父が道具や箱を持ってくる間じつとしていて動かなかった。

それは或る日、家から数百メートル離れた処でカルピ（草取り）をしていた時、倒れている大木の陰に太い毒蛇のウルツが、とぐろを巻いていた。付近に草がなく遠くの方から目につき、びっくりして冷汗をかくような恐ろしさはなかった。

「蛇がいるぞうー」

と、家族に合図すると、父やきょうだいが集ってきて遠方からのぞいて見る。父がその辺にあった木切れをポンと蛇の一メートル余りの処へ投げて、私に

「もし蛇が移動したら、どこへ行くか良く見ておけ」

と、言い残して、兄と二人で箱や道具を取りに家へいそいだ。

父がその年衛生係をしていたので、私の家に蛇捕り道具が

置いてあつた。

しばらくして戻つて来た二人は、首を絞める道具のほかにもう一本同じ位の長さの棒を持つてきた。その棒の先は十センチ程が又になつていた。父がいうのに、この又で一たん蛇の頭から二十センチ位の所を圧えておかないと、蛇の首を絞めるわけにはいかないという。

蛇は少しも移動しないで、すでに三十分は過ぎていた。

準備は出来ていよいよ捕える段取りとなつたが、たたいて殺してしまう時と違って、生け捕りしようというのであるから、どうも気持ちが悪い。若し飛びかかつてきたら、どうするか、生捕るどころか反対に噛まれてもしたら大変な事になる。私たちは父と兄のする事を少し遠方から心配しながら見ていた。

先ず兄が又の木で首を圧えようとするのであるが、とぐろを巻いていては圧えられないので蛇を移動させなければならぬ。又の木を近づけると、何回となくその木に噛みつくのであるが、その度に毒で又木のぬれるのが良く見えた。

三、四回噛みついたがとぐろを解かないので兄が又木の先で蛇全体を持ち上げると移動を始めた。その長くなつた瞬間に頭から二十五センチ位のところを圧えた。蛇はバタバタと跳ね回る。案外太く、我々の手首より太い。蛇はおこらせると余計に太くなる様である。

胴体を押えている棒に噛みついたり、巻きついたり、死にもの狂いで暴れるのを父が別の道具で首を絞めようとするのであるが、頭を動かし噛みつきはするがかんたんにくびをし

める輪の中に頭を入れないので二、三度しくじっていたが、首元を兄が圧えているのでその内につかまえて箱に入れた。

ふたを釘づけにした上、なおロープで十文字にしぼり、夕方二人でそのロープに棒を通してかついで持ち帰り、川辺りの終日陽の当たらない所へ置いた。箱が二匹入れなので、もう一匹捕えるまで生かして置かなければならない。蛇はしぶとく、一ヶ月や二ヶ月何も食べなくても死なないとのことであつたが、万一箱の板が一部腐つて逃げたらどうするかなどと、いらぬ心配をしたものであつたが、その時は案外早く次の蛇が見つかつて、やれやれと連合会の衛生係りに届けると、ついでに鉄道駅まで届けて欲しいといわれ、駅に届けると付近にいた人々が、集まつてきて、恐るおそるも珍らしがつて見ていた。

送料は向う持ちであつた。

送り出すと、大岡政談の映画ではないが、まずまず一件落着で、後は交換に頂く血清を待つばかりであつた。

ところが町へ出る度に衛生係りの所へよつてみるのであるがなかなかこないなので、半年か一年もしてから談判状を送つてもらつたところ、何んと十二匹送らないと一本の血清が頂けないということであつた。

二匹を捕えるまでの心配でも大変であつたので十二匹はとも、とてもと、血清は買う事にして、以後蛇は食べたり、強壯剤にと蒸し焼きにし、粉末として使った。と、言つてもそれ程沢山とれたものではない。

（後注・正しくは、二匹で血清が貰えるそうだ）

第四話

毒蛇

一九四五、六年の或る日私のカメラダ（労働者）がウルツに手を咬まれた。私が早速ヒジの上をレンソ（布）でしばり、殺した蛇をバケツに入れて8キロの道をカローサ（馬車）で、ロンドリーナのサンタ・カーザ病院にかけたのであった。

道々「痛いか」と聞くが、「ノン」の返事に、心配の内にも安心で、一時間半位で病院に着くと、医者は蛇を見てウルツだから、と、その血清を打つこととなる。

そこらに居る人々はこわごとバケツの蛇をのぞいては患者を見ているのであった。

いよいよ血清を打つ迄には咬まれて優に二時間にはなろうが、痛みは来なかった様であった。

血清を打ったのは、お昼頃であったから、この調子なら、夕方にはつれて帰れるかと思っていると、医者は、

「心配はいらないが今日は入院で、明朝つれに来るように」

と言われるので急いで帰って家族らに安心させ、翌朝心も明るく迎えに来て見て、びっくり仰天したのであった。

部屋に入ると本人は

「何も痛みはしないが腕がはれてきた」

と言いつつ腕を見ると肩の付け根迄、はれるもはれたり、シャツの袖も張りさけるばかりにポンポンである。色ド

ス黒く、見られた物ではない。私はびっくりして

「ドットール（医者）を呼んだか」

と尋ねると、もう来るとの事であつた。

私は、『しまった』と思った。弟が咬まれた時の、菅野氏の手当を見ていたのに、今日は立派な病院が出来ているので、素人手当をして、万一の場合の責任問題なども考えてわざわざサンタ・カーザ病院に来たが、この始末だ。困った事になったと心配しているうちにドットールが来たが、ドットールも驚き、再び血清を打つ事になる。

そこで私が、弟の咬まれた時、七本も血清を立てつづけに打って何事もなく助かった話をしドットールの打ち方の本数が少ないのではないかと言つて見たが、

「医者に任せておけ。」

と言う事で仕方なく、その日もつれては帰れず、到々十日程入院していて、無事、腕も取られずにすんだ事は幸いであつた。

中央区では、桜田渉といつて後日クリチーバに移つて亡くなられた人が青年の時やはり蛇に咬まれた。父親が旅行中だったので、隣から隣へと知らせが走るが、結局はいつも犠牲的な世話役である今川氏のお世話になる事になる。

今川氏は個人で常備に血清を持っていてそれを持ってかけて、先ず一般用の血清を一本打つて、病院へ運び込んだのであつた。然し始めの一本を打つ迄に、七転八倒の苦しみであつたとの事であつた。その証拠と話に出るのが、彼のね

ていた寝台がメチャメチャにこわれてしまったとの事であった。

それでも今川氏の一本が早かったので治ったのは幸いであつた。

此の今川澤一氏が、町から四十余キロ離れた土地に居られた時、隣りのフアゼンダのカマラーダ（労働者）が蛇に咬まれたと言う知らせを受けて、ここでも血清を持ってかけつけると、支配人が、「この血清は一般用だから、効果が少ないから打たなくて良い。私が町へ行つて医師を連れてくる。」と乗馬で出かけた。

四十余キロの道を往復する上、医師も、待っているわけでもないので捜すのに手間がかかったか、医者の方の来るのに一昼夜を過ぎたとの事である。患者は恰度二十四時間目で亡くなられて結局医者は間に合わなかった。

今川氏は私の一本を打たせてくれれば、或いは助かったものかと残念がつて居られた。自分の使用人でないから後の責任問題を考えると支配人の反対を押し切る事も出来なかったのであるが、かわいそうであつたと言う。

又、或る時は馬が足首に血をにじませていた。草わらを捜すと太いウルツ―が見つかった。

馬でも

「死なせてはかわいそう」

と、大勢でナワをかけて倒して血清を一本打った。その時には一本しか無かつたらしい。

「それでもその一本で馬は助かった、あんな大きな馬でも一

本で助かったのを見ると血清とは有難いものだった。」
とは、これも、今川君の体験であつた。

血清は有つたが、やはり蛇は恐ろしいものであつた。

(註) 桜田氏の咬まれた時は体中が腫れあがつて着ていたカ
ミーザ(シャツ)を脱がす事が出来なかつたとは立合つた近
所の平田利夫氏の話である。

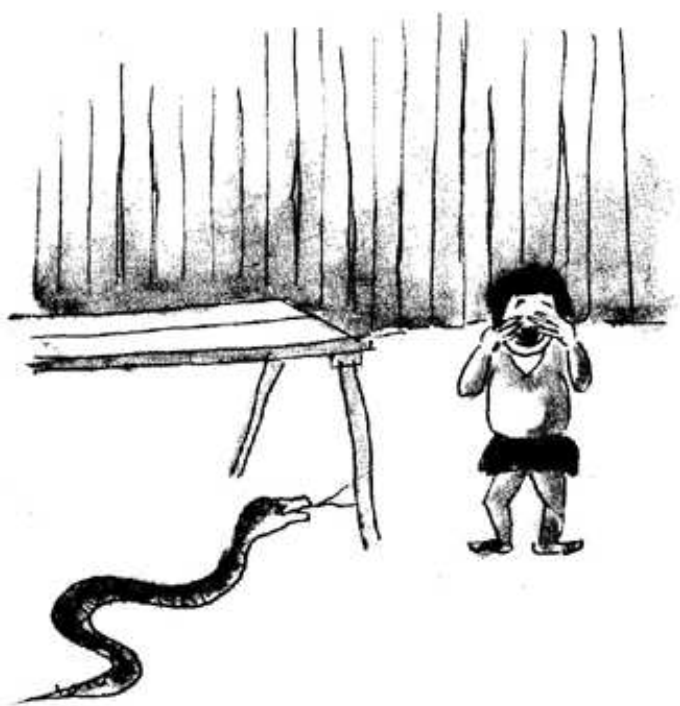
とに角蛇の毒で腫れる時はドス黒く大変に腫れるもので、
今にもハチサケルかと思われる程である事は、私も見て知つ
ているが、全く恐ろしいものである。

(文庫編集部注・インディオのツピー語でURUウルツー。1メートル
70センチくらいになる。猛毒。ブラジル中央部からパラグアイ、アル
ゼンチンの北部にかけて生息する)



第五話

再び毒蛇



私が此の頃昔の事を書く為に今川澤一氏を訪ねた。

それは、弟の省三君の若い時の事を確める為であつた。

話が一段落すると、今川君が、「噛まれたわけではないが」と、又毒蛇の話を書れるのであつた。

それは開拓当時の或る日母親が畠で仕事をしていて倒れている木をまたいで見ると片方の足で毒蛇ウルツの首を踏んでいた。びつくりして「蛇だー」と叫んで近くにいる家族の方へ走つて来たので、澤一君が「かまれたか」と聞くと、「踏んだけど噛まれなかった。」というわけ。そこで蛇のいた処

へ行つて見ると、なる程大きいウルツが居たので、棒をさがして打ち殺したと云う事であつた。

「あれが踏み処が首だつたから助かつたので、もう少し違ふ処を踏んでいたら必ず噛まれていた筈で、ほんとうに運が良かったと思つている。」

と話されたが、聞いていても寒けのする様な話である。

又、私の家でも、びっくりした事があつた。

その日は兄夫婦が長女を連れて遊びに来ていた。長女が、やつと歩ける程度で一才半か二才とはなっていない赤ん坊であつた。

私の妻が畠から家に帰つて来ると、その赤ん坊がサーラ（応接間）の入口に立っていて、

「モウ モウ。」

と、言い乍ら家の中を指さしたと云うのである。「モウーモウ」とは、赤ん坊に「恐ろしい物。」と教える時の私たちの言葉である。それで妻が赤ん坊の指さす方を見ると、なんと僅か二メートル程前のメーザ（テーブル）の下に大きな毒蛇がソロソロと這っているのであつた。びっくりした妻は赤ん坊を抱いて、兄弟のいる処へ走つてきたのであつたが、私はそこに居合わせず、兄がいて、兄が長い木の棒で蛇を表へ投げ出して殺したのだそうであるが、相変らず相当な太さの蛇であつた。私が来た時には早、皮をむいて陽かげにぶら下げてあつた。

この蛇の大ききさと言うものは、生れた時は小さいものだか

ら、若い細い、短いものも居る筈なのに、我々の目に止るものは大抵手首位の太さで、一メートル位が多いのは、どうしてであろうか。あの大きさになった頃から毒に自信が付いて、動作がにぶくなって人目に付き易くなるものかも知れない。とに角、猛毒のあるウルツーとか鈴蛇のカスカベールなどで我々の手の指程の太さの若い蛇に行き会う事は殆んどなく、目につくのは大抵手首の太さ位はあつて気持の悪いものである。

私たち兄弟は恰度二十年、殆んど毎年の様にデルーバ・マツト（原始林の伐採）をした為に、フォイセ（大鎌）を使っていたり、カルピ（除草）をしていても、蛇の近くに行くと気が付く様になった。この事は前にも書いたがそれは大抵の場合、蛇に近着くと蛇は尾の先を振るわせて、「俺が居るぞ」と知らせてくれるのであつた。毒を持っているので威張っているであろうと私達は思っている。その事が解つてからは、蛇に対する不安はずいぶんと少なくなつていた。

さて私は此処で、毒蛇に付いて五度書いている次第であるが、三番目の話で、ブタンタンが、十二匹送らないと、一本の血清を呉れないと言うので、送るのを止めて、食べてしまったと書いたが、あの項を書き乍ら十二匹とは少しおかしいと思つて、此の頃年寄りを尋ねて、聞いて見ると、二匹入れの箱を送ると、一本か二本の血清が送られて来たとの事である。結局は私の世話をしてくれた人が、一寸横着していたらしいのである。詳しく確めもせず、ブタンタンを長い間誤解していた事を申し訳なくここに訂正しておきます。

第六話

卵

一九三五年の或る日、中央区の二組の松原様のフエジョン（豆）の中のカルピ（除草）が遅れて困っているというので、手伝いに行つた事があつた。

私の家から三人と、近所の西谷家から二人の五人で二日行くとカルピ（除草）は終わったが、此の仕事を松原氏一人でしてはその間に草は太るし大変であつたかも知れない。最後の日のアルモツサ（昼食）に、唯の御飯に生卵に塩をふりかけて頂いたのであつたが、大変うまくて、毎日こうして生卵のアルモツサが出来たら有難いものだと思つた事であつたが。その事を思うと相当粗末な弁当で過していたものであつたらしい。と、言つてもまずくて食べられないと思つた事も無かつたが母は弁当作りに相当苦労されて居た事であろうと今頃になつて思うのである。

さて、此の項で私が卵の事を書きたいと思ふのは鶏卵に付いては松原氏に御馳走になつた時の思い出だけで、次はウルツ、いわゆる我々のもつとも恐れていた毒蛇の卵で、卵焼きを作つて食べた勇敢な御夫人が居た事である。

それは一九三五、六年頃の或る日の事であつた。近所の婦人が、私の母に話されたのに、良人が倒れた木の陰にいる毒

蛇を見付けたので、エンシャーダ（鰐）で引き出して殺したのであるが、エンシャーダで引き出す時に蛇の腹が引き切れて腹から卵がぞろぞろと出て来たのであった。そこで主人が、その卵で、卵やきを作れというので仕方なく作ると、先ず育ち盛りの子供に食べさせよというので二人の子供に食べさせると、成分が強すぎたのか、少し目がつり上がった様な気がするので心配だと若い夫人が私の母に相談に来たので、母が行って見ると、なる程目付きが変わっていて如何にも強い物を食べすぎた感じであつたという。それでも医者と呼ぶ事もなくその内に無事におさまつたのは幸いであつた。

私も毒蛇の卵は見た事は有るが、卵巣は薄いビニールの細長い袋の様な透明な物で、その袋の中に十二、三個入って居るもので卵の殻は無く、白身は透明などろどろした物で見えるのは黄色いキミだけである。

私が見た時の物は、そのキミの中に既に蛇の子が生れて一寸程になっていた。父の話では毒蛇は腹の中で育って、母蛇の口から産れ出てくるとの話だと云う事であつたが、口から生れると云う事は正しいか何うかは判らない。が、体の中で蛇になっているのは真実である。

この蛇の卵やきを作った母親は九十余才で生きて居られるが少し記憶がうすれて来ているので此の話を聞いてみても難かしかろうと思ひ、又、食べた子供は健在であるが幼少の時の事とて覚えている筈はないと思つていた処、母親は、どれだけ驚いたのか、成長した子供にその時の話を聞かせてあつ

たとは、聞いたその本人の話である。その時の子供も早六十才を越えたがロンドリーナに健在で居られる。

又、卵で珍しいのはトカゲの卵である。我々は卵といえば鶏卵の様にわれ易い殻が有る様に思うが、トカゲの卵は、ゴムマリの様なもので、地面に落してもはね返りこそすれ割れるようなものではない。その上普通の卵と違ってまん丸いものである。

卵一つにしても色々な特徴を持たせてその動物に都合の良い様にして下さっているこれがいわゆる神のはたらき、神の恵みというものであろうか。

第七話

毒蜘蛛（くも）

毒蛇に次いで恐ろしいものに毒グモが居た。

体力の無い幼児では痛さに耐え兼て命を亡くした話を聞いた事はある。かわいそうな事で何故に蜘蛛の血清を準備して置かなかったのであろうか、蛇の場合は大抵の植民地で用意していた事を思えば油断で有ったと思う。

とにかく蜘蛛に噛まれると随分と痛いと言う事であった。その蜘蛛が、朝起き出して靴をはく時に、靴の中に入って

いて、噛まれる人がたまたま居た 毎朝注意をして靴の中を改めて、はけばよいのであるが、それ程いるわけでもないの
で、毎朝などと注意は続かないものである。

それで運悪く噛まれたという人が植民地に数人は居たかと思ふ。

或る時、同船者の大西氏の奥さんが噛まれたと通知があったので、両親が見舞に行くと、見て居れない程痛がるとの事であつた。

然しクモの痛みは二十四時間で治まるものと言って、部落に血清の準備はしてないのが普通であつた事は始めに書いた。それで近所の外人に尋ねてみると、焚火をして、その上に青草をかぶせて、いぶし、その上で患部を温めると痛みは薄らぐと教えてくれたので、早速、大西宅へ行つて実行してみると、まるでウソの様に痛みが取れたと、喜ばれたのであつた。

その後、私の兄が噛まれた時は、空かんに湯を沸かして、それに足を漬けていたら痛みがすぐ取れて楽であつたので、皆さんにお報せした事であつた。

さて、その毒グモであるが、私は噛まれた人からも、これが毒グモと教えられた事がないので、その大きさや姿については知らないのである。

今、此の項を書き乍ら思い出す事は、物置や、畠でも、藁やごみの沢山積んである処を崩して見ると土際に時々大きなクモがいる事がある。彼我共にびつくりするのであるが、身

構えたクモの前足から後足まで測れば十五センチも有るのがある。或いはもつと大きいのもいたと思う。然し、私はあれが毒グモであつたのか、どうかは知らないのである。

唯幸いな事は大人であれば命を取られる心配は無いという事であつた。

結局怖ろしいのは毒蛇であつた。

サソリなども日本の雑誌等には、かなりに恐ろしいもの様に書いてあるが、パラナ地方のサソリは、カフエーの収穫の時にペネーラ（ふるい）の中で時々見つけたものだし、時には刺されもしたが、大した事ではなかった。

又、猛獣としてはオンサ（ヒョウ）がいるのであるが数が少なく、又、人間の近くに出てくる事は殆んどなく、吠える声を聞いたと言う人はいるが、歩いているのを見たという人には殆んど行きあつた事がない。

タマンドア（蟻喰）等も前肢の強い動物で危いと聞く事はきいたが実際にあの爪で引きさかれたと言う話は聞いた事が無い。

道にじっとしているのに出合つて、棒でたたいて殺した事はあるが、動作のにぶいものであつた。それは此方の一撃が、うまく急所を打っていたからかも知れない。

結局恐ろしいものは前にも書いたが、毒蛇であつて、他に猛獣らしいものは居ない良い処である。

日本でさえ、北海道では昭和になつても熊に行き合つて襲われる話は有つたのに南米はその点恵まれた所である。

然し猛獣はおらなかつたが、それ以上に恐怖を感じさせるものがあつた。それは落雷である。

毒蛇で亡くなつた人と、落雷で亡くなつた人の数では、毒蛇の方が多いが、落雷も相当に人命を奪っているのである。その事は落雷として項を改めたい。

此の項を書いた後でアサイの人から、アサイでは一家の主人が毒グモに咬まれて一度は入院して助かつたが、運悪くも再度咬まれた時は落命したとの事であり、それはそれは大變に苦しんだとの事である。若し温める事を知っていたら助かつたであろうに氣の毒な事であつた。

此の頃（九五年末） 大阪方面に外国から入つた毒グモが既に千匹も見つかつたとの事であるが、氣持ちの悪い話である。なんとかして撲滅してほしいものである。

第八話

雨を降らす木



一九五〇年代の末頃からか、カフエーをムード（苗）で植える事が盛んになって来た。セメンテ（種）で植えると発芽までに相当な期間がかかるので、その間のタンパ（フタ）の材料が困難になってきていたので考えられたのかも知れない。それで私たちもムード（苗）を作って植えるべく苗作りが始まった。

私のファゼンダでは幸いにセーデ（住宅）から近い所に

マツト（森）があつたので場所の問題では大いに助かったし、又水も近くて便利であつた。唯、こまかい作業なのでカマラーダ（労働者）達の不器用さには困らされた。苗の植込みなど、捗らない事誠にはなはだしいのであつた。

そこで、仕事の指導をするのであるが、それが仲々大変であつた。

生来細かい仕事をした事のない者に無理を言つても、彼らも大変なのである。

だからと言って大目に見ていて、いつ迄たつても上手にならなければ、両方共に損であるから、辛抱強く教えたものであつた。

我々移民で来た者は何とかして一儲けして帰国したいという考えがあつたからか、初めてする仕事でも、すぐに此の仕事はどうしたら捗どるか、又どうすれば余り疲れないでできるかと、仕事の方法を考える習慣がついていた。その為には力には大きな差のある外国人たちに比べても仕事の面では、押し負けを喰わない成績を上げるようになっていた。

それがカフエーの苗作りの様な細々した仕事では尚更で、此の仕事場は特に気を付けていなければならぬので、目の離せないものであつた。

然し、そうして気を付けている内にカマラーダ達も、次第に上手になってくれたので、此方の欲も出て、少し外部に売って、此方の苗代を儉約出来る様にと、何万本か、売る事にして余計に作り出したので、私は苗床にいる時間が多くなつて来ていた。

そうした或る天気の良い日の午後の事であった。思いがけない雨だれの音に気が付いた。

「おやつ、雨になるのかな。」と、思つて、立木の間から空を見ると、空は明るく快晴である。

“どうしたのかな” と、考えていると、パラパラポトポト、大粒の雨だれが落ちてくるのである。” おかしいなあ” と思つて、気を付けてみると、近くに生えている直径五十センチ位のフエジョン・クルーと一般に呼ばれている木の下だけに水滴が落ちてくるのであった。

セツカ（天気）が相当に続いているので、自分で雨（水滴）を降らせて、自分を守っているのかと思つたが、それ程のしめりになる量は落ちて来ない。

結局は自分の必要に余る分があつて、それを落しているのかと思つたが、それにしても随分と吸い上げているものだと感心させられたのであった。

若し此の木を切り倒したら、見る間に青い葉は枯れていくのに、此の強い太陽に照らされながら青々と茂り、尚成長して行くのであるから大変な水分が必要である。その水が三〇メートルも三十五メートルもの上方迄昇って行くのは、根が押し上げるのか、それとも葉が吸い上げるものか等と考えさせられた。

後日の事であるが、ユーカリの丸太をブドーの柱に使うのに長持ちさせる為とて、二メートル半程に切つて、皮をはいで、すぐ硫酸銅の溶液の中に立てると溶液は三十センチ位しかないが、二メートル半の上迄、見る間に青い液が昇ってい

くのであった。根も葉も無いのに昇って行くのは何の働きか、無学の私には解らないのである。

ここで又、話を元に戻すが、労働者の話ではフェジョン・クルーの他にも、そうした雨を降らす木はあるとの事であった。自然の中には不思議な様な事があるものだ。白然とは神様の働きというが、神様には出来ない事はないのだ。

第九話

恐ろしいもの

ブラジルに原始林を買う契約をして渡ってきた私たちが、先ず心配していた事はどんな猛獣がいるかという事であったが、結局は毒蛇に落着いて、此の第三部が書かれているのである。

然しこれを書いていると、『信ちゃん、もつと恐ろしいものが居るよ……。』と、感じさせてくれるものがある。

それは何かというと、人をだます人間である。この方が余程恐ろしいと、だまされた当人は思っているはずである。

それで、その主な事件を二つ、三つ紹介しておこう。

私がロンドリーナの市内に移ってくると、隣りに中〇〇さ

んという人が居られて数年すると引越されて行かれた。

此の人が、友達四・五人で、二百数十^キ離れた処に原始林を買ったのであるが、私も既にその近い所に仕事を拡張していたので、或る日、中〇〇さんの土地を見に行った事があった。

人夫が入ってどんどんと開拓がすすめられていた。中〇〇さんも此のコーヒー景気に乗って開拓を始められたか、人の考えは同じ様なものだと思ひながら見てきたのである。パルミットヤシの美しい、砂地としては地味のまあまあの土地であつた。

ところがである。それは後の話であるが、私が見てきた時の人夫共は、中〇〇さんの人夫ではなく、もう一人同じ土地を買った人がいて、その人が人夫を入れて開拓をしていたのだそうである。

中〇〇さん達が行って、私も此の土地の地権を持っているのだがと話すと、その人夫らは、『誰かがきて、うるさい事を言うなら、ブチ殺しても構わない、後の始末は主人がする事になっている……』と、言つて、粗末なヤシの葉の掘立小屋の壁に鉄砲が数丁実弾をこめて立てかけて有つたそうである。

そこで結局は、開拓していた人に再び、その人が払った地代に今迄の開拓賃その他、その人に損害の無い様にして折り合いをつけてやつと自分達の物にしたという事であつた。

開拓費はどうせかかる費用で、損害は土地代の二重払いであるが、折合いを付けたのは良かった。立腹して投げ出して

も払った金は戻らず、別に買えばやはり地代は払わなければならない。怪我でもしたら大変である。

又、私の妹の主人は日伯両国語が判るのであったが、それは関係がない事かも知れない。

或る時パウリスタ線のトツパンの少し奥の方の町のダッタ（宅地）を売りに来た人が、小学校時代の先生であったので信用して中心街に近い所を買って分割払いの支払を済ませ、地権取得費用（エスクリツラ代）を送って安心していたところ、後日確認に行ってみると先生も居らず、土地もなく、市役所に行つて見ても、自分の名前は初めからなかったとの事であった。

ひどい事をする先生もいるものである。

又パラナ州では有名な大成功をしたM氏、一時は造幣局とまで言われたインスタント・カフェー工場まで始めた有能な事業家を、土地売ブローカー達が組んで大きくだまし、それがM氏には致命傷ともいたい程の大損害を与えたらしく、その事件を機会に日系社会に余り顔を出さなくなった。

又、私の近所でカフェーの六年の契約栽培で溜めた金でやつと希望の土地を買って引越して行くと、自分達の見ても買ったと思っていた土地は他人の土地で、六ヶ年の汗の結晶は根こそぎ盗まれたという気の毒な家族がいた。

あれやこれやを考えると、恐ろしいのは何よりも、正直者をダマシテ歩く人たちであったのかも知れないのである。

では項を改めて、隣りにおきた詐欺（サギ） 事件を紹介する事にしよう。

第十話

詐欺（サギ）

（これは隣りのT氏の事件である）

或る日、子供が「お客さんが来ている」と言うので、サーラ（応接間）に入ってもらい、よごれたカミーズ（シャツ）を取り替えてサーラに行つて見ると見知らぬ人が来ている。

妻がカフェーを持ってくる。カフェーを飲みながら話を聞くと「アドーボ（肥料）の良く利くのがあるが買つて欲しい」と言う事であった。

「なんだアドーボ売りか。」必要でない人が来たものだ。と、思いながらも、断われれば良いと思いながら、「アドーボは、組合から買うので他人から買うわけにはいかない。」と、断つて、世間話になった。十分二十分世間話の末、「それはそうとご主人はこのシッチ（土地）を売るつもりはありませんか。私の知り合いが此の辺の良いカフェーの植えてあるシッチを欲しいと搜しているのですが。」と言う。もうとう売るつもりはないので断わると、「そうでしょうなあ、こ

んな立派なシツチを売っては、再び手に入れる事は難かしいですからね。」と、断わられるのが当然と言う態度。

「然し立派なカフェーでも毎年実を取るので良い肥料を氣を付けてやっていかないと、木がいたんでくるでしょう。私のすすめる肥料は評判が良いのですよ、来年は少し考えて、一部にでも使つて試験してみて下さい。」と、言いながらパスタ（鮑）から、カタログを一枚出した。

その時、思い出した様に、「あつ、そうだ。良いカフェー向きのマツト（原始林）の売り物があつた。此の土地ですが、友達が、買つて喜んでいたので、事業に失敗して手離す事になったんですがね。」と言いながら一通のエスクリツーラ（地権書類）を取り出した。「カルトリーオ（役所）のレジストロ（登録）も済んで喜んでいたのでがね、どうですか、此の土地を買つて仕事を拡張してみませんか。」と、すすめるが、T氏が、六〇にもなつて拡張の氣持はないと断わると、「そうですね、今から又荒山の開拓は大変でしょう。誰か知り合いで希望者がいましたら、知らせて下さい。頼まれても仲々売れるものでもなくて私も困つているのです。」と言いながら、「此れから、ゴヤス、マツト・グロツソ地方を廻ってくるので二、三ヶ月かかりますが、向うの人では話になりませんからこれを置いておきますから、希望者がいましたら歸つて来た時に教えて下さい。」と、言つて、置いて出て行つた。

T氏は他人のエスクリツーラだから紛失してはと思つてガベツタ（引出し）に入れて忘れていた。勿論、買手を捜し

てあげれば、コミッソン（手数料）はくれるかも知れないが、そんな考えはなく、唯カフエーの収穫に追われていた。

或る日、反物売りのマスカッテ（行商）が来た。どこかの商店の破産で、投げ売りをしている、十着分宛になつてゐるが、市場の半値以下だから良い買物だと上手なすすめ方であつたが、田舎への反物売りは、だます為に作られた安物で買つてはだめだと先輩に注意を受けていたので相手にしないでいると、その内に諦めて、商品を片付け乍ら、「それはそうと、おじさん、此のシッチオを売るつもりはありませんか、私は頼まれているのですがね。」と言う。勿論売るつもりもないので断ると、「とに角、フォルマード（既成コーヒー園）か、マツト（原始林）でもカフエー向きの良い土地の欲しい人がいるんですがね、誰か売りたい人を知りませんかね。」と、反物売りが、反物を片付けながら、土地を捜している人の話を始めた。なんでも大きくトマテ（トマト）とピメントン（ピーマン） かなにかを作っていて久々に大当りしたが、野菜は危険だからかたいカフエーにかわりたんですよ。此の人に良いロツテ（土地） が見つかる、私も助かるのです、昔大変世話になつた人でね。などと、カフエーを飲みながらまじめな話ぶりで二、三十分も世間話を混えて語つたあと、「私は、当分町のこの友達の家に世話になるのでロツテが見つかったら電話を下さい。」と、言つて、友達の名刺に自分の名前を書き添えて引き上げて行つた。

T氏はそんな人の名刺など必要はないと思ひながらも捨てもせずに棚の上にのせて置いた。

後になって、此の名刺を捨てて置けば良かったのにと後悔したが、事件は既に巧妙に計画されていたのであった。

つづく

第十一話

詐欺（サギ） 続

反物売りの車がガタガタと音を立てながらカリヤドール（作道）を上り切った頃、やれやれうるさいものが来てペルデ・テンポ（ひまつぶし）をしたと不満に思いながらコリエータ（収穫）の後で粗末になったカフエーのカッタソン（粒拾い）の続きにかろうかとした時、「フト」二、三ヶ月前に来たアドーボ売りが置いて行つた土地の事を思い出していた。

夕方仕事を終えて、家に帰り、一風呂あびて、ジャンタ（夕食）の後、サーラ（応接間）に来て見ると、さつき来た反物売りの名刺がある。電話をしてやろうかと思つたが、まあそんな事、ほうっておけと、その晩は電話をせずに寝てしまった。

二、三日した土曜日の事であつた。いつもの様に買物に出る事になって用意していると何となく気になって棚の上の名刺をポケットに入れて買物に出たのであつた。

買物の後で名刺の宛名の人を訪ねると、反物売りは商売に出ている、いないが用件を伝えて置くという事で、荒山の売り物がある事を告げて帰ると、やがて三日程してから、あの反物売りがやって来てエスクリツーラ（地権書類）を良く見て、此のゾーナ（地方）は何回か行つて知っているが、念のためもう一回行つて来る、四・五日したら又来ると言つて、ロッテの番号、概略のマップ（図面）の写しや地主の名前などを詳しく書き取つて行つた。確かな仕事をする人は良く注意をするものだと感じに思つていた。

四・五日したらと言つていたが、一週間が来ても来なかったので、大した土地ではなかったのかも知れんと恩つていたら、或る日地権を置いていったアドーボ売りが「土地の希望者が見つかったので地権を返して欲しい」と言つてやつてきた。

そこでT氏は

「地権はここにあるが、今此の土地を見に行っている人がいて帰ってくるのを待っているところだ。」

と、言うのと、

「それでは其の人を待ちましょう。此方のお客はそのあとの事でいいですよ。それにしても、仲々売れない土地によくも一度に二人も買手がついたものですね。」

と言いながら帰つて行つた。その二、三日後にどうしたかと思つていた反物売りが視察から帰つて来た。

「実は現地に行つてみたら思ったよりも良い土地で、買手を連れて、もう一回行つて来たので遅くなった」と、言う。

又、土地の値段は、土地が大変良いので、あなたが言われた二倍半に言うて買手は、一割引いてくれれば買つても良い、と、言つてその一割の現金を手付として置いて行つた。それで相談ですが、このネゴシオ（売買）は、丁度倍になるので倍値に売つて半分コミッソン（手数料）にくれと言つても、地主はくれないから、一旦此の現金を入金にして、あなたが買い取つて、それから売る事にしましょう。私のコミッソンは、あなたが半分儲けるその四分の一を頂ければ有難いです。と言うので、話はとんと進んだ。

倍の値段の一割もらつて、私はその金で二割の入金をして、後金は四割ずつ二回を六ヶ月、一ヶ年払いのレットラ（借用証書）を入れ、売った分は一割受け取つて、後金四割は六ヶ月、五割を一ヶ年のレットラで貰つた。

尚渡したレットラは自分のアッシーナ（サイン）だけで保証人なし。受取つた分は二人宛の保証人付きであつた。

思いがけない幸運が舞い込んだものだ、と、一人北叟笑んでいたが六ヶ月はまたたくまに過ぎて、始めの四割の期限が近づいてきて少しおかしいと気がついてくるのであつた。話が少しうますぎる。

自分で少しも骨を折らずに、今二・三日すると莫大な金が儲かるというのは、どうも一寸話がうま過ぎる。・・・さてよ、若し買手が払つてくれなければ、私には払う金はない。然し私はレットラ（借用証書）を渡してある。私の貰つたレットラは、信用出来る人かどうか分らない。若し、もし、

モシか、と、心配になって近所に住んでいた私に相談に来られたのであった。全ては思いがけないサギ団の仕業であった。

此方が警察を通じて調査にかかると、警察の中に一味の者がいて此方が渡したレットラ（借用証書）をまだ三者に売れずに持っている事がわかり、四分の一程の損害で解決はしたが、解決する迄大変にいやな思いをさせられたのであった。

此の頃はこんなサギの話は少なくなつたが、それは不景気で金が動かないからかも知れない。

然し災難は忘れた頃にやってくるという。要・注意だ。先ずうまい話がきたら、第一そんなうまい大儲けをさせて頂ける様な良い事をした事があるかと考えてみると良いと言う。何事も蒔かぬ種は生えぬと言う事だから……

第十二話

お産



初期の移民が苦勞した事の中には、先ず言葉が通じなかった事、耕地の労働者の家には便所が無い所が多かった事、慣れない仕事で日当にならなかった事、マラリヤで次々と家族が亡くなって行つた事等々沢山有るものだ。

こうして数えると、不自由した事、恐ろしかった事、色々有るが、これは移民の一般の眼から見たもので、いわば男の感じた事であるから、立場を変えて婦人方から体験を伺う

なら、そんな事より妊娠・お産ではなかったかと思うのである。私は別に調査したわけではないが、コロナ（日系社会）には再婚者が大変に多い様に思われるのである。特にお産で妻を亡くしたと言う人に再々出合うのである。若し再婚者の統計を調べたら、女性が何れ程お産で犠牲を払われたかが解るだろうと思う。

私は、町から七・八キロの処に住んでいたので、割合に安心であつたが、それでも血止めの注射も準備して置き、少々の知識は母から聞いていたので、産婆さんのおくれた時に助かつた事が有るが、幸い私の妻は割合に安産であつた。医者に遠い処でのお産では近所のお産の経験者を頼むしかなく、それは大変な事である。

A氏は妻を亡くして数年して再婚した妻は四十才前後の気性の良さそうな婦人であつた。体は小形の人であつたが健康で良く良人を助けて働いていた。一年程近所に雇われていたが、その内に十五キロ程離れた某植民地に移転して行かれたが、移転して間もなくめでたく妊娠したのであるが、四十才前後の初産であつたから大変な難産で苦労されたとの話が伝わってきた。

産婆さんは間に有つたのであるが、産れそうにしている、容易に出て来ない。病院に運ぼうかと近所の人達も集まつて心配するのであるが、そこ迄頭がきているので、もう産れるであろうと、産婆さんも心配しながら一生けんめいに手当をする事、実に数時間産婦も産婆さんも疲れるだけ疲れたそ

の果てに何とかお産は終った。産れた児は女の子であった。母子無事にと言いたい、疲れに疲れて九死に一生という例の比率より、更に更に苦しんだ末のお産であったが、運良く何とか母子共に助かったのは助かったのであった。

近所の人の話ではとても助かるとは思えなかった、との事である。

現在なら何んの事はないセザリアーナ（帝王切開）で簡単に産ませるだろうが、当時の片田舎ではとてもとてもその様な事の出来る医者もいなければ、時代ではなかったのである。

又、近所にいたTさんは移住に当面して、若夫婦に三才余りの男の子一人の三人家族では許可が下らず、妻の妹を借りて、家族の構成替えをして渡つて来たのであるが、来て間もなくファゼンダ（耕地）生活の苦しい最中で二人目のお産となつて、そのお産の事情は私は聞かなかったが、母子共に助からなかったのである。出血が止まらなかったであろうか。

そこにいた妹は、二・三年の内に日本に帰すからとの条件で連れて来られたものではあったが、姉の始めの子供が残っている、嫌々ながら後添えになつたと、私の母にコボシていた。

その主人にすれば仕方無い事で、妹を連れて来ていた事は幸いであつたのである。此の人の渡伯は大正五・六年の事であるから、“娘三コント”といわれる言葉さえまだうま

れていない移民の神代時代の事であつた。

”娘三コント”とは、三コント位の金を溜て置かないと嫁は貰えないという事。一コントの貨幣価値は、一人前の男が一ケ年農家に奉公して受ける給料がその位であつたとの事であるから、三年間酒を飲まず、煙草も吸わず無駄使いの一つもしないでの金額であるから若い者が結婚する事は大変であつたのである。その理由は移民の初期には全くの女不足であつたのである。

そんな時代にT氏には妻の妹を連れて来ていた事は幸いであつた。

この妹さんには幸いに、姉の様な難産はなく七・八人いや十人余の子供に恵まれていた。実は十人もいらなく、末の三・四人は欲しくなかったが、出来てしまったとこぼしていた。

今日の様に産児制限が解らず、流産するかと未熟の酸味の強い果実を食べたり、六〇センチ位の所から何回も飛び降りてみたが、ためであつたなどと私の母に話していたそうである。

第十三話

お産（2）

ローランジャ市にてラジオその他を販売していた利光国弘氏が、今はイグアスーの発電所のダムの底に埋まってしまった、セツテ・ケーダス（七つの滝）の観光地として有名であったグアイーラの手前のウムアラーマの近くにJICA（国際協力事業団）の融資で日光植民地を造成した。

その時、私の新らしく購入した耕地に労働者用の住宅を何軒か建てていたが、その時の大工さんの梅山氏が先ず五アルケール（約十二ヘクタール）契約すると、間もなく手伝いとして働いていた田並某氏も同じ面積を契約した。

先に契約した梅山氏は、子供の教育の事と子供が三人共娘さんであった為か、入植を断念し、男の赤ん坊一人の若夫婦の田並氏は入植して行った。

赤ん坊をかかえての若夫婦の原始林の開拓は大変であったと思うのであるが何年か良く頑張っていたようであるが、何人目かのお産の時に、出血が止められずに若い奥さんを亡くしたとの事であった。

私の若い頃はロンドリーナに近かったけれども血止めの注射液を準備しておいた事は前項に書いたが、妻のお産は案外に軽くて、その必要もなくすんだ事は幸せであった。

それでも、一度は赤ん坊の頭がそこまできていてなかなか

産れてこない。産婆さんは弟に迎えに行ってもらったのであるが、行きの八^キが自転車、来るのは産婆さんの白動車であるが、がたがたの道であるから案外ひまがかかるのである。それに妻のお産が軽い方ときていて早く出てきたわけである。

ところが頭は見えていても出て来ないのである。そこで仕方なく母に聞いていたように静かに頭を立てに廻してやると生れ易いというので、赤ん坊のクビに無理がいかないと心配しながら廻してやると、さっと飛び出してきて安心して事があつた。

又、一区植民地にいた安達氏の奥さんの場合は随分年若い時からのお産であつたからか、大変な難産で苦しみ、とても母親が助かるまいと思つたそうであるが、奇蹟的に母兄共に助かつた。

私にしても、又、安達氏のように一区にいたのでは産婆さんと呼ぶのは、案外便利であつた方であるが、産婆さんはお医者でないので難産の場合には、自分の力におえるか、おえないかと境で苦勞するわけである。

ロンドリーナの場合初期は殆んど丹夫人に、その後は戸田夫人にもお世話になるのであるが、共に車で来てくれるので、難産の場合は病院に手廻ししてくれたので助かつた。

ある日カルロポリスの山本勝男氏のいる処で、この入植当時の婦人たちのお産の苦勞話が出た。

苦勞人であり、良く他人のお世話をされた彼には、それ

は、それは色々の事があつたらしい。

へその緒が、巻きついていたり、逆児であつたり、逆児でもかんとんに産れてくれれば良いが、体は出たが、アゴがひっかかつて、出て来ない時には、急いで、此方の指先をアゴに当てて、出易くしてやらないと、窒息する事になるし大変だったと話してくれた。

全く今の若い人には想像もつかない昔話の様であるが、その若い人の生まれた時の事であるから、そんな大昔の事でもないのである。

お産の話など余り口にしないから尚早く忘れられてしまふが、此の頃七十才八十才という婦人方の大方は大変な心配をされた経験者なのである。

『喉元すぐれば熱さを忘る』と、いうことわざはあるが、それでは一寸淋しい。苦勞した、又、心配した婦人方に、更にその為に若い命を失つて逝つた方々に誠に申し訳無いと思うのである。

第十四話

アサイ街道



一九三十七・八年頃かと思う。二、三トン積みのカミノヨ
ン（トラック）を雇って野球の試合であつたかと思うが始
めて、アサイへ出かけた事があつた。若い者が二十人足らず
でポエーラ（土ホコリ）の道を平気で出かけた。チバジ
ー河はバルサ（渡し舟）で渡った。

当時はどこかへ出かけるという事は誠に楽しかったもので
ワイワイと騒ぎながら入植の時に始めて渡つて以来三四年
振りに見るチバジ―河にさえなんとなく懐かしさを感じなが

ら渡って、いよいよアサイ街道に人ったのであるが、今思い出して見ると誠に狭い道であった。大木があると、それを倒さずに、よけて通るのでその木からぶら下っているシツポー（つる）が車のカビーナ（キャビン）に当り、カロサリヤ（荷台）に乗っている者の頭をたたくので、モトリスタ（運転手）も大木の脇を通る時は徐行し、カロサリヤの前に乗っている者が、フォイセ（大鎌）やファツコン（大ナタ）で切り落とし乍ら進んだ事は忘れられない思い出なのである。

モビメント（交通量）が少ないのでポーエーラは余り立たなかったが、狭い道に急なクルバ（曲り）が沢山有り、従って非常に遠い所という感じを持たされたのであった。

その後何十年かしてアスファルトになると言つて、サン・ジョンの入り口に石が沢山運ばれて来て、近く舗装されるかと喜ばせたが、それから何年も何年も待たされたものであったが、此の道の思い出はそればかりでなく、私等の様に年に一、二度しか通らない者には毎回と言いたい程、坂をゆるやかにしたり、クルバ（曲り）をゆるめたり、その為に小さな山の反対側を通つてみたりしていたものである。

ジャタイとイビポランの間にしても、長い間出している果実の売店の処で、イビポランに向つて右廻りをしていた事もあり、又、ジャタイから鉄道に従つて大變遠く左廻りをしていた事もあったり、結局は数回の変更の結果現在地のアスファルトが敷かれたのであった。ジャタイ・アサイの間では

局部的には思い出せない程の変更が有って、今日の道になっているのである。

そしてその度毎に道の両側の人に大なり小なり迷惑をかけているのである。

今、昔からの道の大小の変更を調査して見てもその労に対する価値は報いられないだろうから、それは良いとして昔、会社が道を開いた時のマップ（地図）が市役所か何処かにあるであろうから、そのマップに、同じ縮尺で現在のアスファルト道路を合せて見ると、どの位はみ出す処が有るか驚ろく程有る事だろうと思う。

此の道は山脈にかかつていて石が処々に出ていたので特別に苦勞されていたのであるが、その変更の度毎に、前にも書いた様に両側の人に与えた迷惑も解るし、道に苦勞した技師のことにも気が付くかも知れないから全くの無駄な事だと計りは言えないと思う。

又これから育つ子供達への教育にもなろうと思うのである。

アポゼンタ（退職）した技師さんにでも調べてくれる人はいないものかなどと思う。

（註） 初期のアサイ街道が狭かったという事は、ロンドリーナ方面は土地会社の資本が大きく町から町への道は始めから大変広くあけてあったので余計に思った事かも知れない。

第十五話

私の最後



私は生れた時に胃腸が弱くて下痢ばかりしていたので母は心配したそうである。医者に診察してもらっても此の児は育たないと言われていたそうである。

それがどうにか小学校に入学する処まで育ったのであつ

た。その頃から私の記憶するところとなるのであるが、朝ねぼうで、学校の時間ぎりぎりまでねているので、「早く起きて学校へいかないと遅れるぞ」と、おこされて、急いで顔を洗って、ごはんを頂くのであるが、学校に遅れそうなので急いで食べると、食事の終る前にはや、腹痛をおこす始末であつた。

此の腹痛には「富山の売薬」よりも、近所の人の家伝の妙薬が即効を呈したものであつた。

それを一服飲むと、すぐに痛みは治まるので、それを飲んで学校へ走つた。

此の家伝の妙薬というのは、何でも神社の松の葉と、麦のモヤシを乾燥して粉にしたものという事であつたが、誠に私には妙薬であつた。

然し私は依然として健康児にはなれず、何人もの医者から二十まではとても育たないと診断され親に心配をかけていた不孝者であつたのである。

私がそういう状態であるのに、私が八才の時、長兄が亡くなつた。十八才であつた。次兄は生後二ヶ月くらいで亡くなつていて私たちは知らないのである。そして三男の兄が今では長男の様にしているのであつた。体は元氣であつた。その内に四男の私も死んで行くのかと思つた両親は、その頃から、冬の無い暖かい処へ行ったら、或いは私を死なさずに済むかも知れないと南米移住の気持ちをもつたのかも知れない。

当時は南米移民と満州・蒙古、いわゆる満蒙開拓百万家族

と軍部後援の宣伝で渡って行く人の多い時代であったが、父は暖かい方が良いといってブラジルに決めたのであった。

親が亡くなってから気がつくのであるが、全ては私の為であった。

南米移住についての少しの知識は亡くした長兄が残っていたのである。

それから数年昭和の初期は戦争に向って不景気が続いた上、私がいよいよ結核性るいれきで命旦夕に迫ったらしい。X光線でアゴの下側を十回余り焼いた頃ブラジルに来る事になったのであった。

私は常に栄養不良のやせ型の少年であったが、特に寝つくという事もなし自分としては普通の子供だと思っていた。年に一度「回虫駆除デー」の日に、回虫のいるらしい顔色のすぐれない児童が「マクニンゼリ」という虫下しの丸薬を飲まされるのだが、何時も一番先に

「沼田君。」

と、先生に名ざしされるのが、いやでたまらなかった。しかし仕方が無いと諦めていたものである。その弱い少年が十五才にしてブラジルに移住して、医者迄二十八キロも歩いて行かなければならない僻地に入植したのであるから大変と書きたいところだが、何と一度も医者にかかることも無く到着早々から、デルバ・マット（森林の伐採）、焼け跡の枝片付け、プランタ（蒔付け）、コリエータ（収穫）と、労働力として間に合ったのであるから不思議である。

パラナに来てからも医者が必要はなく、開拓につぐ開拓と楽しく仕事に熱中出来たのであるが、或る日、或る時、突然最後がやってきたのであった。

それは四十四、五才の頃であつた。イバイ河を渡つて、その西側の耕地に向つて行こうとしていた時の事である。バルサ（渡船場）に着くと上流の大雨で増水していて渡れず車が長蛇の列をなしているのであつた。二日は待たなければならぬまいとの事である。

どうしようかと思案にくれていると、

「お前達はジープ（ジープ）であるから行こうと思えば、別便で渡してやろう」

と、言うので聞いて見ると、小さな舟にジープを載せ、人間は別の小舟で渡すというのである。

「大丈夫か。」と念を押すと、

「今迄は大丈夫だった。」という。

「よし、それでは任す。」と決めて、ジープは小舟に斜めに二枚のプランシヤ（厚い板）を敷いて、どうにか載せ、私達は別の小舟に乗った。処が、体だけ渡りたい人は大勢いて小さな舟に立ち乗りで二十人余り乗り込んだので少し不安になつて船頭に尋ねると、自分達に任せて置けという。ままよ、「舟に乗ったら船頭任せ」とは昔から言われている事だと、乗り込んだのはやはり失敗であつた。

こうした時は少し余分に払つても少な目の人数で乗るものである。

ボートが岸を離れる頃、ボートの沈み工合を見ると一パールマ（約二十センチ）位しか浮いていないのであるから私は任せたとはいながら心配だった。

あの広いイバイ河のちょうど半程に来た頃、舟の触先が沈んで二十リットル位の水が入ったのである。私はその触先から四、五番位の処にいたので良く見えたのである。これは大変と思う問もなく、又、水が入る。舟は増々重くなる。

「しまった。ここで私の最後となるのか、何とか助かる方法があるか、私は泳げない」「万事窮す」

それでも私は舟は沈むとしても木製のボートであるから沈んでしまう事はない筈だがつかまっている事が出来ないか、それとも何か板切れでもあるかと考えている時、舟首にいた船頭があわてて、後方のモトリスト（運転係）に速力を落せと号令をかけた。その内にも二・三度程水をかぶったが、速力が落ちると舟は水平に戻って水をかぶらなくなって私共は助かったのであった。一生忘れられない一瞬であった。

第十六話

私の最後（2）

前編で、これが最後かとリオ・イバイ（イバイ河）の行程で覚悟を決めたその時から数年過ぎた頃、モラロジ―と云う教えが入って来て、心引かれるものがあり、セマーナ（週）に1回位は集会に参加する様になっていた。

従つて毎月フアゼンダ（耕地） 通いその他で相当のキロ数を車で走るのであるが、自分から怪我をする様な事故をおこした事はなかった。

だからと言って、何もなかったかと言えばそうではない。或る時は、マリंगाから、ドットール・カマルゴに向つて走っていて、道の広い処で、ジーピ（ジープ）が、突然ガターンと傾いて止まった。どうしたのかと思つて驚いている私の横からローダ（車輪）が一つ前方に向つて転がつて行く。降りて見ると、後のローダのポルカ（ネジ）のトラ―バ（止め金）が折れて、はずれたのであった。幸いに近くにポルカも落ちていたので、自分達で何とか車をはめトラ―バは有り合せの釘で間に合わせて、用は足りた。

又、或る時、マリंगाからイバイ河を渡った向う側で、山の中腹を削つてあけた道を、曲り曲つて下っている時、急にジレッソン（ハンドル）が利かなくなつた。

テルミナール・デ・ジレッソン（ハンドルの先の止め金）が、ことん、と、はずれたのであった。車は妻や子供を乗せ

て静かに走っていたので、恐れる事はなかった。更に幸いな事に右側の谷に向わずにバランコ（土手）に向ったので急ブレーキの必要もなく、パラショッキ（バンパー）が静かにバランコ（土を切り取った処）にエンコスタして（当って）止まった。

グラグラ、として車がバランコに向う時妻がびっくりして「お父さん、お父さん」と大声を上げたが、何にも危険はなかったのであった。怪我也、スリキズも無かった。然し此の二回の事故を交通の激しい処で起していたらただでは済まなかった筈である。

こうして何一つ怪我をする事なく過していたが、一九七五年頃の或る夕方、突然に死に神が目前に迫って来た様な事件が起ったのである。

それは或る夕方所用から帰宅して着物を着替え、急いで食事を済ませ、モラロジーの集会に出席すべく、ルア・ソーザ・ナーベス（ソーザ・ナーベス通り）の家を出た時のことである。

集会はジャルジン・シャングリラーの赤木さんのお宅であつたかと思う。四・五回クルバ（曲つて）をして、キンチーノ・ボツカイウーバに出、ポスト・シャングリラーの角を右に曲つて、アベニータ・リオ・プランコを下った。月は無く暗闇であつた。

汽車の踏切りが有るので、ブレーキを踏んで、右手を注意してすかして見ると、暗やみの中を音もなく汽車がすぐそこ

へ来ているのであった。びつくりして、更にブレーキに力を入れる。

はや、汽車は照明も付けずにすぐそこに来ているのである。

とても、レー（バック）で後戻りする余裕はない。”万
事窮す” と思った。

然し人間とは不思議な物で、こうした万事窮した何秒かの瞬間に色々な事を考えるものである。

汽車が見えてから私の前迄来る十五メートル程の間、それはホンノ何秒かの事であるが、その間に思った事は、今此処で此の汽車にはねられて私が死んだら、又、大怪我をしたら、家族はどんなに驚く事か、悲しむ事か。何故もう少し早く踏み切りに気が付かなかったのか、いや、どうなろうと、此れが私の人生の終末と決っていたのだ、あわてても致し方が無い。全ては神様任せだ、等々と、色々な事を瞬間的に考えた。

そして覚悟を決めてジーツと、目の前に来る汽車が車をはねるかどうかを、ジレツソン（ハンドル）をしっかりと握りしめながら見つめていると、全く天の助けか紙一枚の差で通り過ぎていった。貨車が一台二台三台と十台程過ぎた頃少し明るくなったので右手を見ると数台後から機関車が押して来るのであった。「ポーツ」と汽笛も鳴らした。「なんだ、エストラダを既に半分以上の貨車が通り過ぎての汽笛が、何の役に立つのだ。」と一寸恨めしい。然しその時瞬間的に思った事は、待てよ、此の機関車の中が少しでも貸車より広

かったら、助かったかと思っていたのに、ここで最後だ、と、「ジーツ。」と見つめていると、巾には一センチの差もなく、スーと通り過ぎてくれたのであった。

時間にして二分位か、バゴンの十五台が通り過ぎる時間であるから知れたものであるが、命をかけている時は案外長い感じのするものである。

でも無事に済んで、モラロジの集会も済まし、帰宅すれば、家族には何の変りもない。

もしあの時にはねられていたら、今頃はもうだろうと思うと、無事の有難さをひしひしと感ずる。

私は此の事件から人生観が少し変わったと思っている。

第十七話

せんべい焼き

ロンドリーナの郊外の中央区に入植して、始めの半年は、デルーバ・マツト（森林の開拓）、家造り、作物の蒔付け、それが一段落すると、カフェーの植付けと、仕事に追われていたが、次の半年もまた、その収穫に迫いまくられるのであった。

家族が多いのに資金が尽きたので、とにかく食料になるものを確保しなければと、色々な物を植えたのが、一九三四年から三五年にかけては幸いに総てが雨も順調に降って豊作で

あった。

入植初年で仕事に追われて物置も作っていないのに、米が百五十俵位、あずき十二・三俵、イナキビ十俵余、粟十俵余、アルゴドン（綿）三百アローバ余（アローバ＝十五^キロ）、マンジョーカ（いも）やバタタ（さつまいも）は掘らずに置くので保存の心配は無かった。ミーリョ（トウモロコシ）は家畜の餌に少量しか作らなかった。

沢山出来た米はワラのまま畠に積んで、必要な時に脱穀したのだが、随分と雨と小鳥とネズミの被害を受けた。倉庫がないので仕方がない。豊作であつた事を喜べば良いと言う事であつた。

あずきは大変きれいな物が出来たのだが買手がなく、あんなにして食べる位は知れていて、後日捨ててしまった。イナキビは当時モチ米の無い時代で、白分で臼を作つてついて皮をむいて、モチにして何回か食べたが、おいしい黄色い良いモチとして食べられたが沢山有つてどうしようもなく、残りは粟と共に鶏の餌にしてしまった。粟は味見もしなかったのであつた。

こうして初年度が豊作であつたので、次年度はセツカ（旱魃）の為凶作で食べるだけの米も取れなかったが、前年度の物が沢山有つたので生活に心配はなかった。

生活に余裕が出来るようになって気が付くのであつたが、ブラジルでは案外にお菓子の値段が高いのである。ブラジルに渡つてもお菓子屋はしない。自然相手の百姓が良いと決心してきたのであるが、莫子の原料の砂糖と麦粉の値段に対し

て、菓子値が良すぎる。これは一寸考える必要がある。一日せんべいを焼けば、三日分位のカメラダ（労働者）の日当になる。せんべい焼きには雨降りに休む事もない。一人が焼いて、三人のカメラダを使つていけば畠の方も広く作れる、と言う事になり、日本にいる長女（私の姉）の処に手紙を出して、半年程すると一番小型の道具が送られて来たのであった。

ガスも無ければ、カルボン（木炭）も無い時代だからレンニヤ（薪）で焼くのがむつかしく色のそろわない物になったが、せんべいの無い時代であるから、取り合いで買ってくれた。

調子付いて、その内に町の大屋鉄工場で、鉄板で浅いバンデージャ（お盆）を作ってもらつて、変つたせんべいを焼くと、それは倍以上も量産出来た上に良く売れたので、父は将来の為と、今の本願寺の近所に二ダッタ（宅地）を購入したのであったが、その翌年父が亡くなった。

父が亡くなって一年程した頃母が、ブラジルのお菓子の値は良いが、農業も面白い。不景氣が来た時に食糧を持つているのは安心だし、ブラジルは農家が労働者を使つて仕事が出るので有難いから、農業一本にしようと言い出して、調子の良かったせんべい焼きは止めてしまった。

三四年にパラナに来て三七年には氏原氏に再びお世話になってマリアルバに二〇アルケールの土地を購入。又その年市山氏の四年契約を引受けて仕事は拡張されて行つた。

という事は、弟妹たちが成長して労働力となつてきた事で

あつたろうし、又、急場には外人労働者を使う事にも慣れてきていたのであろう。

又、せんべいを焼いていて面白い事が有った。せんべいは砂糖とファリンニヤ（麦粉）を等量に混合して水で煉り、次第に水を増して適當のやわらかさにして、型で焼くのであるが。或る日、もつとおいしい物を作つてあげようとレイテ（ミルク）を十分に入れて煉るとききれいな色に焼き上りおいしいのでよろこんで届けると、後日悪い評判で驚いた事が有った。レイテの匂いが、好かれないのであつた。

おかしな事が有るものである。結局又只の水で練る事になつたのであつた。

（註）氏原彦馬・北。パラナ土地会社の日本人郡長で、日本人に対する土地の世話を良くしてくれた。コレートル（不動産周旋人）で勲五等の叙勲を受けている人が他に居るであろうか、とにかく立派な人である。

第十八話

霖雨（なが雨）

一九四十四、五年頃の事であつた。ボツボツと稲の穂ばらみする頃から収穫する頃迄六〇日、毎日大なり小なりの雨が降つてアロース（米）の大豊作となつた事がある。

私が心配したのは、毎日の雨で全く水田の作の様に見事に出来た稲の開花の日の雨であつた。

夜も昼も小雨が休みなしの様に降り続くので花粉の交配する間が有つただろうかという事であつた。

水田では（日本の話）開花の時に晴れ間が無いと交配不充分で不作になるものだとか親から聞いていたので私はひそかに心配していたのであつたが、降る雨には何うしようもないので天に任せていると、ブラジルは水田でないからか降る方が良くと云う結果になつて、当時の事であるから僅かなものではあつたが大豊作をしたのであつた。

此の雨の時であつた。チバジ―の石の橋が落ちると云う噂が出て、兄弟二人が乗馬で見に行つた。途中イビポランの町でバール（手軽にコーヒーや酒を飲ます店）によつてカフェを飲んだが、一人も歩いていない淋しい状態であつた。更に二時間程でチバジ―河の橋に着いた。

着いて見ると噂とは違つて石の橋の落ちる様な心配はなかつたが、橋の両側は盛り土なので車の通れる様なものでは

なかった。

全く大変な増水であった。

又、一九六〇年代の半ば頃の或る年の事であった。カフエーは久し振りに回復して大豊作の花が咲く事になって来たが、蕾（つぼみ）が白み出す頃から連日の雨となり、晴れ間の無い霧雨の中で開花し散って行つたので、此の時も果してうまく交配できたものか心配していたが、この時も充分に結実してくれて豊作を喜ぶ事が出来たのであった。

カフエーの花には、おいしい蜜が有るので虫媒花だと思われるのであるが、あれだけ沢山咲く花が、みな虫に来てもらわなければ交配しないものなら、虫や蜂の方でも廻り切れるものではないので、風にゆさぶられても交配はするのであると思う。

とにかくロンドリーナでは、稲もカフエーも休みなく降る霧雨の中で開花して豊作であったので助けられた。

それにしても私が不思議に思うのはカフエーの開花である。五〇キロ〜百キロの範囲では殆んど一日の差も無く揃つて満開となる。此の木はどうしたのか二三日おくれて咲いた等と言う事は先ずない。何百万株、何千万株の木が何うしてあのように揃つて咲くのであろうか、不思議でならないのである。

此の項は霖雨についての項なので一寸横道にそれた様である。

この題で書きたかった事に、父が在世中に残した言葉の

「雨に飢餓あり、照りに飢餓なし。」と、言う一句が気になるのである。干ばつにも相当苦しめられる事が有るからである。

そこで、ことわざ事典の有った事に気がついて本棚を捜したら見つかったので調べると、父の話の下の句が出ていた。「照りに餓死なし。」説明に、ひでりの年には凶作がない、干害は有るが、洪水とは違って、どちらかと言えば豊作のことの方が多。昭和八年、同十四年（日本のこと）は非常な干ばつだったが、豊作だった。従って照り年に飢餓なしとか、凶作なしと言われている、と書いてあったので考えさせられるのである。

フエジョン（豆）の収穫期に、霖雨の為に腐らせてしまう事が何回か有ったが、セツカ（干ばつ）の為に稲が白穂となつてしまった事、ミーリオ（トウモロコシ）までが白穂を出しその果に枯れてしまった事など、日照りの害の方が、余程多いと思うのである。

色々な事で日本と反対の物が有るが、農家の天候に対する考えまで反対で有るとは気が付かなかった。

それにしてもブラジルに来て幸いであつたと思う事の一つは、大方の地形が波状形の為、特殊の人でなければ大水に家を流されるという様な事はなかった。加えて案外に台風も無ければ地震もない事だ。出かせぎに来たブラジルに落ち着いた理由には、やはりそれなりの長所魅力が有ったわけである。

第十九話 運動会



運動会は日系人の集団地では、その大小を問わず二十家族も居れば催される慰安行事として此れ程根付いた物はない。私達の植民地でも、若い者の慰安に野球のグラランドを作つてやろうと草分け入植の二年目位に早や、取り掛った様であったが、カンポ（グラランド）が出来て始めの行事は慰安運動会ではなかったかと思う。

ロンドリーナ市内では一九三三年にやはり草分け二年目に

市内の十余家族の日本人を主に近隣に呼びかけて、国際植民地全般で四十家族に届いていない時代に、カンポもないのに運動会を開いた記録が有るので驚ろいているのであるが、町のルア（通り）でもした事であろう。

その程度は想像の出来ない程淋しい物ではあつたろうが、あの日本から移住してきて、ファゼンダの苦勞から切り抜けて、ようやく独立する事に希望を抱いて入植したが、人跡未踏のマツトの中、家族の慰安を考えた先人の一番始めの行事が、この運動会であつた。カローサ（馬車） さえない時代だから、親子で弁当を持って歩いて集まつて、それぞれの顔を見るだけでも楽しまれた事であらうと思う。私共の移転してくる前年の七月一日の事であつたという。

その前の六月十八日に日本移民渡伯二十五周年慰霊祭と、ロンドリーナ（国際植民地）の会館の落成式が催されているのである。そして二週間後には此の会館が国際植民地としての学校として名の付くものの第一号として日本語の教育が始まるのである。如何に我々の先輩が教育に努力されていたかが伺えるのである。当時はグルッポ（ブラジルの小学校）の一つも無かつた時代である。

さて、その三十三年からは陸続として日本人もさる事乍ら、諸外国人もテーラ・ロツシャの肥沃地に魅せられて移つて来るのであつた。当時の日本人は、子供の教育の都合上各地に日系人の植民地を形成して開拓して行つた。三十四年から相当長い期間、八月九月になると山焼きの煙りで太陽が満足には見られなかつたものである。

そうして建設される植民地には必ず、カンポと日語学校が作られ年中行事として慰安運動会が催された。

尚、此の運動会は、気候の故か、農作業のためか、その多くが、天長節祝賀慰安運動会として催された処が多く、子供たちに「天長節は何の日か。」と、きくと、「運動会の日だ。」と、言う答えが返ってくる様な事であった。

この運動会も初の内は日本人だけで外人たちを走らせなかったが、その内に外人達をコロノ（小作）として使う人が増えて来て、その子供らを全然走らせない事も出来ない、単純な競技には仲良く走らせて喜ばすようになって来た。それで或る年、面白い事がおきた。

フツテボールの田舎選手が来ていたので、「日本人と競争してみるか。」と、誘うと「よろしい。」と言うので、策戦をして短距離では負けるから中距離なら良からうと、二百メートルのグラウンドを二周と相談すると、絶対に日本人には負けないと張り切るので、それでは、と、此方では中距離の強い者として、私の弟と他に二・三人、外人の方も二・三名出て、思わぬ処で日伯對抗競走となった。見物も張り切って、スタートしたところが、一周目で日本人側が百メートルのあたり、即ち半分も遅れたのである。応援する方も、これでは一寸ひど過ぎる、とても追い付けないのではないかと半分あきらめていると、ブラジル勢は二百五十メートル辺から弱り出して三百メートル位でダウンして歩き出したのであった。彼らはフツテ・ボールの選手で短距離には強いが、長距離に

なると経験が無いのである。此方の選手は同じ速度で進んでいたが、三百二、三十メートルで追い着き、追越すも彼らはもう走れないのである。此方の青年は更にラストを元気良く走って見せたので、俺らは初めに走りすぎたと、くやしがつたが、賞品には同じ物をやって喜ばせたので、此方の策戦に気がつかれず無事に終ったのであった。

昔話を書き乍ら思い出した一コマである。

第二十話

殺生



私の家では浄土真宗の信者であつたからか、子供の頃から殺生をしてはいかと親から良く聞かされたが、人間とは矛

盾した者で、その父が、時々ペスカ（魚取り）に行くし、子供の前で鶏の料理などもする事があった。

又、サンパウロ州からムダンサ（引越し）して来る時に途中で動物を捕む為の虎ばさみを買って来たりもしたが、だからといってカッサ（狩猟）が好きという人ではなかった。

誰もがマツト（森林）の中で暮すと、自然、ビツシヨ（けだもの）や毒蛇などが出てくれば衝動的に捕えるとか、殺す事になるのが自然と云うものではないかと思う。

仕事をしている処へタツ（アルマジロ）が出て来たら、『ああ、かわいい物が出て来た。よしよし』等と、見て居れるものではない。「それっ」と、追いかけてみるのが自然である。

追いかけて掴えると掴まえたという喜びと共に、殺さなければならぬか、と、嫌な気持ちがおきてくるのであった。それが毒蛇の様に此方に危害を与えるものなら、「かわいそうだ」などと言う心は湧かないが、余り害を与えないものであればどうしてもかわいそうだという気持ちが湧いてくるのであった。

或る時五、六キロ程のタツを捕えたので、元気を出して頭をたたいて殺して料理をする事になった。

内臓を取ってから、肉の部分を殻からはずせば、肉は牛肉の様な赤いきれいな肉であった。

野菜と煮付て食べる事にして刺身の様に切っていた。一切れ、一切れ、と切って大皿に並べていると、既に殺してから二時間も経っているのに、その一切れ、一切れの肉が、ピク

ピクと動くのであった。

それを見付けた妻が先ず気持ちが悪いと言い出し、私も良い気持はしなかったが、事此処に至っては、食わずに捨てるこそ尚殺生と勝手な理屈をつけて、皆んなで食べたのであったが、それから今日迄、山のけだものを捕えておいしいと思つて食べた記憶はない。

山の動物の肉が完全に死ぬ迄、即ちきざんでも動かなくなる迄にはかなり時間がかかるものの様である。

隣家の石川氏の夫人がその事で『悲鳴』をあげた事が有つたとは青年会長を長くしてくれた泉君の話である。

或る日大きな毒蛇ウルツを捕えて、料理をした時の事である。皮をはぎ、内臓を取り去つて、夫人に渡すと夫人が五センチ位にきざみ、バツシヤ（たらい）に入れて、きれいな水で洗つて料理をしようと、水を汲んで、きざんだ蛇にかけたところ、五センチ程にきざまれているものが、バタバタとバツシヤから飛び出たというのである。

本当にこれこそ、『まさか』と思いたいが事実である。夫人が悲鳴をあげたのも当り前である。

然しどうして頭を切り離してあるのに、水の冷たさを感じるのであるのか、相手が怖ろしい毒蛇なので、常識外の不思議さを感じるのであった。

『毒蛇は性分の悪い執念深い奴だから強いものだなあ……』と、言いながら、食べたり、粉にして強壯剤として服用したのであった。

生きる物はみな死にたくないであろうが、此方に危害を加えるものでは共存は出来ないし、鶏、豚、牛の如きも犠牲になつてもらわなければ此方の生命が持たない。

殺生も或る処迄は許して貰わないと……………。

第二十一話

相互扶助

着伯後直ちに入植したセツテ・バーラスでは、自分の手で一アルケール（二・四二ヘクタール）を伐採したが、その時は、それ程の大木もなかったので下草を刈つて木を倒す事になると片方から順次に倒して行つた。それがパラナに移ると主にペローバ（檜）であつたが、直径六十センチ以上の物が相当数あつたので、順次に倒していると、全体としての仕事が遅れるので普通以下の木を初めに倒してしまう事にした。

そうして大体を倒して置けば、それらが乾燥してくれて、後で大木をぼつぼつと倒していても山を焼くのに差支えないだろうと、考えたのであつた。

それにセツテ・バーラスではまだ持参の資金が有つて、半

分は請負する人に倒してもらったが、ロンドリーナではリベ
イラ河を下り、ジュキア河を上り、ジュキヤ駅から、サント
ス、サンパウロ、オウリーニョス、ロンドリーナと遠いムダ
ンサ（引越し）で資金が欠乏して請負わす金などなく、食
料にも苦勞した様であつた。来客用にと持参した新品の布団
や、時計などを売らざるを得ない状態であつた。

かろうじて小米で炊くだんごの様な御飯で過していたの
に、その小米も急激に三倍にもはね上つたので親は次に何か
売れる物があるかと心配していたらしいが、これと言つて売れ
るものもなく、食べる物を早く作る事を考えなければと、近
所のファゼンダの契約者のカフェーザール（コーヒー園）
を一二〇〇株程、又借りして野菜類やフェジョン（豆）、小
豆等を、デルバード（開拓地）を焼く頃には既に植えて置
いたが、とても食べられる迄には期間がかかるのであつた。

然し世の中は有難い物で、米価が三倍にはね上つたら、ま
だまだ上ると思つた人が、買い溜めをされていたが、一応三
倍に上つた米価が下がり始めたので、買い溜めした人が、来
年払いで元金を払ってくれる人を捜しているとお世話をし
てくださる人が来られた。父は若しお金があれば自分達も
買つていたかも知れないので、幾らに下がっても、元金は払
わせて頂く事にして五俵のセパレード（上級品）を貸して
頂いたが、小米を食べていたところへ、立派な御飯が食べら
れる事になったのである時はうれしかった。（当時の一俵は
六〇キロ入れであつた）

カンナもかけてない空箱を利用した仏壇の仏さまにも供え

られたが、「仏さまも喜んで居られるだろう」と喜んだ母の姿を思い出す。

此の五俵の白米は、植えたアロース（米）の収穫の出来る迄間に有ったのである。

幸いな事にはその年は豊作で、その翌年は全くのセツカ（旱魃）で何も出来なかったが、二ヶ年の食料と小使いの不自由はなかったのであった。

話は大変横道にそれてしまったが、初年度のデルバ・マツトの処へ戻す。

中以下の木を倒してしまつてから残した大木を倒しに掛つたが、父と兄と私の三人で一日に三本位しか倒されないのに疲れる事は、余計に疲れるのであった。何故かと言えば、一本の木の倒れる迄休みなしにマツシヤード（マサカリ）を振っているからであつた。それでも大木は響音を立てて倒れてくれるので、その音で疲れを吹き飛ばしてくれるような気がしたものであった。

或る日大きなペローバに親子三人で挑戦した。アルモツソ（昼飯）をすませて取り掛り、夕方迄には倒せるであろうと張り切つてマツシヤードを振つたのであつたが、日が暮れる様になつても倒れず、諦めて帰る事にした。父は、「風でも吹けば夜の中に倒れてくれるかも知れん。」

と、言われたし、私らも、大方切つてあるので、「そうなるかも知れん」と思つて引き上げたのであつたが、翌日来て見ると倒れていないので、再び挑戦するのであつた

が、大きな木の中心部が残っているものであり、切り口が次第に狭くなっていて切り難いので大変であつたが、アルモツサにしようかと話し合っていると、ミシミシ、ミシミシと音を立てて傾きかかったので「それっ」と勢いついてマツシャードを打ち込むと、バリバリツと音を高めて二、三百年の樹齢の大木が倒れたのであつた。切り口は四角い様な形になつていて長い処は二メートル有つたのである。

アルモツサから翌日のアルモツサまで恰度三人手間掛つた此のペローバは私達の切つた木で一番大きかつた。

移民は商売人でも、巡査上りでも、学校の先生でも、学生でも、希望を持っていたのでどんな苦勞にも耐えて来たと言いたいが、戦争での命のやり取りとは違つて、平和の中で家族楽しく希望に燃えての事であるから苦勞と言う表現は適当でないかも知れないのである。

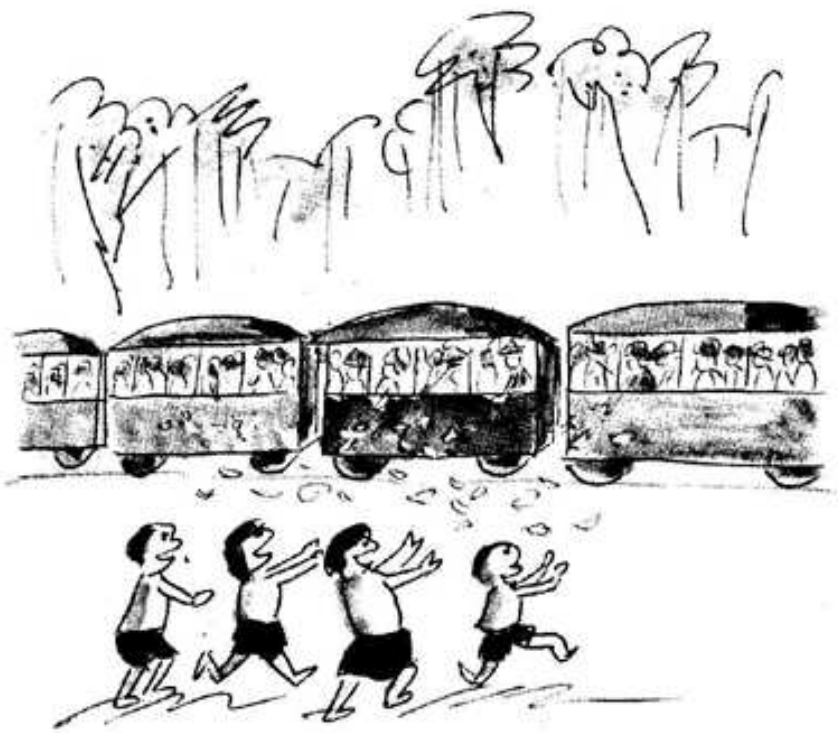
それで大木の事であるが、ロンドリーナ大学の敷地にはペローバの大木が沢山残されていたものであるが、その後、稍から枯れて来て、その殆んどが枯れて倒れてしまった。

マツトの中では灌木の上に抜きん出て威容を誇る様に天に聳えている大木も、下の灌木が無くなると、自分の天下の様であるが、却つて自分を守る事が出来ない実状を見て、自然界も、人間界も相互扶助で成り立って居る事を知らされるのであつた。

即ち大きな自動車工場も沢山の下請業者がいるので成り立っているのではないかと思うのである。

第二十二話

サントスより植民地へ



神戸を出港して五十七日目、一九三三年七月二十七日によ
うやく目的のサントス港に入港。

翌日は荷物が降され、移民には上陸して町の散歩が許され
たので降りて見たが、遠くへは行けず港の近くを歩いて、屋
台からポン・ドーセ（甘いパン）を一ヶ買って食べた位の
事しか憶えていない。

午後になるとボツボツと配耕先からの迎えを受ける人が出て来た。

「イヤー 気持ち悪いなあ、俺の行き先ムジナの穴だつてよ、何か騙される見たいだなあ。」

と、大声で話す人がいて、皆んなで大笑いした事だけ憶えている。此の人モジアナ線のどこかへ行く事になったのであった。

移民はその配耕先の良否で当座の運命が決るのであるから心配である。

その内に両替屋が入って来て、

「小使の残りの円を持って上陸すると国が違うので使えないから取替えてあげます。決して私は損をかけない、出迎えの人に相場を聞いてみなさい」

と、言い乍ら両替が始まった。先輩移民が二、三人、此の船で来た人に会いに来ていて、上陸しても簡単に両替屋に行けるかどうかも分らないし、又、此の人の相場は悪くないと教えられたので、父も、どうせ船中の小使いの残りだから僅かのものであると替えてもらった。相場は一円が四ミルレースに少し切れ、一ドルが八ミルレースに少し切れていた。ドルを持つている人は殆んどいなかった。

がやがやとしている内に二十八日は暮れて、翌二十九日にはいよいよ船員達とも別れて上陸し、荷物の検査となる。大きな倉庫内で、一行千三百名余、三百家族余りのムダンサ（引越し）であるから大変である。

移民は罰金を取られる様な物は持って来ていないのに何故

検査等するのかと思つてみたが、検査がなければ、悪い事を考える者が出るだろうから仕方がない。

それにしても、今日の訪日客の様にトランクの一つや二つでもあけられると元通りに納めるのに大変なのに、ムダンサであるから尚更大変である。

当時の検査官は横着で移民の行李のふたを利用して、ちよいちよいと移民の品物を取るのであつた。それを見て来た人達が、どうせ少しは取られるなら、「何かをやった方が良いか、何をやろうか」と、コソコソと話し合っている風景が見られた。

大体が楽でない生活を切り上げての移住であるから、余分な物などはなし、現地に入れば必要なもの計りなのに無理な事である。

それでも大して税金らしい物を取られたという話も聞かず、検査を済ませ、それぞれの地方へ向つて別れを告げ、私達は、会社の出迎人に案内されてサントスの潮旅館に投宿したのであつた。

此の旅館に投宿するとお客様であるから、相当の御馳走でうれしかったが、驚ろいたのは、私達の同船者であつたか、二週間前の便で来た人であつたか忘れたが、此の旅館に入つて間も無く、頼りの主人を病で亡くされた若い婦人が二、三人の子供を連れて途方にくれて居たのであつた。父母が幾許かのお見舞いをあげてはげましていたが、人生とはきびしいものである。

私たちは此処から海岸を汽車でジュキヤ迄行く事になるので、その時の弁当がサンドイッチになるといつて旅館の人がパンとモルタンデーラ（ハム）を買って来ていたが、兄と相談してあの肉は臭いから食べられないかも知れないから砂糖を買っていこうと町に出て字引を見ながらアスカル・アスカルと言つて見るが通じない。その内に店の人が、字引を見せよとの仕ぐさをするので見せると「スーカか。」と、言つて、四〇〇レース出すと、レフィナード（白砂糖）を一キロ程くれたので汽車の中で大助かりするのであつた。

つづく

第二十三話

サントスより植民地へ



サントス上陸が一九三三年の七月二十九日で、その夜はサントスの潮旅館に投宿した。

翌日、若い者二、三人でサントスの町を見物に歩いたが、長居する筈はないのでその日の汽車でジュキヤーに向ったと思う。

弁当にモルタンデラがはさまれると解ったので、食べられるかと心配して、兄と二人で辞書を持って苦勞しながら砂糖を買ってきていたのであった。

弁当が出たのであるから、午前中の発車の汽車で出発していた事になる。

汽車に乗って二つ三つ駅を過ぎた頃弁当のサンドイッチが配られた。汽車が何処かの駅に止まっていた時であつた。

一人に今の五〇グラムのポン（パン）より少し長かつたと思われるポンがニコずつ配られた。

一つずつ紙に包まれていた。あけて見ると、一つは例のモルタンデラ（ハム）で、もう一コはゴヤバーダ（くだもの羊かん）であつた。

忽ちこのモルタンデラ（ハム）は喰えんといつて窓から捨てる者が出た。処が何人もの子供達が集まってそれを拾うのである。何かかわいそうな気がするのであつた。

慣れてない食物は仲々食べられないものだが、その内にパン迄臭いと言つてモルタンデラのはさんであつた両側をチギッテ捨てる人もあつた。私らは砂糖を持参していたので、砂糖を付けて食べると少々のおい位はなんとも感じなかった。

モルタンデラ事件は終つて汽車は走るが、町々の家の看板にアルマゼン、アルマゼンと書かれているので案内人に尋

ねると、

「アルマゼンの後にパウロとかロッペスとか書いてあるでしょう。パウロ商店とか、ロッペス商店という事です」

との事であつたが、あの海岸地帯ではアルマゼンと使い、パラナ地方ではカーザ何々、カーザ何々というが、此れも一つの方言であるかも知れない。

夕方日没の頃終点のジュキア駅に到着した。

下車するとすぐ近くの日本人の旅館に案内された。二行は八家族で四十数名はいたのであつたがそれぞれに部屋は有つた。ジャンタ（夕飯）の食事は二回に分けられて私の家族は二度目となつたので先の人の食事を遠くから見ていると、大変な御馳走である。

その上にシルコがあるので、あれっ食事にシルコが出ている。「有難い」と、思った。弁当のパンに甘いゴヤバーダ（ゴヤーバの羊かん）の大きいのが入っていたのだがシルコに妙に魅力を感じさせられていた。

その時、宿の人が

「皆さんの荷物が届いて只今倉庫に降しました」

と通知して来たので、すぐ隣りという倉庫迄行つて見ると、サントスで荷造りした、そのまま届いているので安心したのであつた。

やがて私達の食事の番になつて、先ず計画していた「しるこ」を取ると、餅も、だんごも入っていないので、変な「しるこ」だなあと思っていると、そこ、ここから、このしるこ

甘くないと言う声が聞えて来るのであった。私も味見してがっかりしたのであった。唯のフエジョン（豆の塩味に煮たもの）であつたのである。

それでも豊富な肉の御馳走もあつたので満腹して急いで床に入った。翌朝は二時頃の出発と言う事であつた。小さな舟でジュキヤ河を下つて、リベイラ河との合流点でセツテ・バーラスに上る蒸気船に乗り替える為にはそんな時間に出発しなければならぬとの事であつた。

夜中に出発した舟は暗い中に相当順調に下っていたが、夜明け少し前に浅瀬に乗り上げてしまい、男達は川の中に降りて舟を軽くすると言つて私達子供迄降りたが、下りに向つて勢い良く乗り上げた舟は容易に浅瀬から離れず苦勞をしていたが、その内になんとか離す事が出来て、次の舟への乗り替えも間に合い、アルモツサ（昼食）の頃に目的のセツテ・バーラスに到着出来た。舟の乗り替え場に着一て一たん荷物を陸揚げしている時、野原に放し飼いの鶏が関の声をあげた『コケ コツコー、コケ コツコー』これを聞いた同行の一人が、ブラジルの鶏が日本語で鳴いたと懐かしさうに言うと同『本当になあー』何か一寸ホットした感じがしたのである。

然し一日か二日遅れて到着した荷物には吃驚仰天とは一寸大げさでは有るが、ジュキヤの倉庫ではキッチンと着いていた物が、セツテ・バーラスにて受取る段になると色々なものが盗まれているのであつた。

早速引受会社の海外興業株式会社の窓口に訴えたが、結局

ウヤムヤに葬られてしまった。

聞くとところによると、犯人は日本人が主犯で盗品はサンパウロの市場に売られている事が殆んど解っているらしいのであるが、会社としても手が付けにくくて困っているらしいとの事であった。

移民がくる度毎に盗まれるらしい話であった。

それもジュキヤの倉庫からセツテ・バーラス迄の舟の中で盗まれるのであるから、会社で番人をつけておいてくれれば良いものをと腹が立つのであった。

着伯早々嫌な出発となったが、更にひどいのは会社が開発している植民地に相当の日本人を集め乍ら全く将来性の無い事であった。

然しその事に気が着くのは少し後の事で、希望に満ちた八家族、四十余名の移民は、神戸を出帆して六十日目に期待していた植民地に到着して、各自の入植地が決らぬ内に婦人方には、生れて始めての二ヶ月余の、アゲ膳、スエ膳の航海中の生活から、リベイラ河のきれいでない水で炊事せんたくをしなければならなかった。希望と不安をかき混ぜたような複雑な気持ちの中で、いや応なしに移民の生活が始まるのであった。

第二十四話

国際植民地の草分け

植民地における草分けなる言葉の意味を考える時、ロンドリーナの場合誰が草分けなのか迷う。

その理由では少し条件がややこしいが、その為に、これだけ発展したロンドリーナで草分け者の表彰をした事を聞かない。

私は仕事の都合で三年程ロンドリーナを離れた事はあるが、その間にもなかったと思うのである。

それで十五周年誌を調べて見ても、一九四〇年七月六日に国際植民地入植拾周年記念祭を催したとは有るが、草分け者の表彰は書いてない。

拾周年には私も二十二才の青年で出かけて行っただけで記憶する処では、バラツカをたてて芝居をしたり、土俵を作つて角力大会も賑つたが、草分け者の表彰はなかったと思う。

そこで大変遅きに過ぎる事ではあるが今からでもその子孫を捜してでも敬意を表した方が良いと思うのである。

では誰が草分けかという事になるのであるが、いつも話題に出る人では、大原正治、富田正彦、丹 俊男、大原 貢、山手寿一、山崎茂心の六名の人である。

その理由は、北パラナ土地会社の最初の購入者で地代支払いの受取証の番号が一番から六番迄に残っているからである。一九二〇年の三月十七日との事である。然し此の人達の

入植は少し遅れているのである。

一番早く引越して来たのは、荒 義雄氏一家である。一九三一年十月八日との事である。ところが此の一家は、中央区に土地を購入していたのではあるが、既にカフェーを植付けてあつた土地会社のフアゼンダ・コアツチーの契約者となつて、自分の土地の開拓は翌年から始めた様である。

では自分の土地の開拓では誰が早いかといえ、荒氏の到着より一週間おくれた十月十四日に、風早 慶味、原 国次郎、早坂 幸太郎氏らの三家族が、第一区に入植されたといふので、此の四家族をロンドリーナ、或はパラナ国際植民地の草分けとするのが妥当の様であるが、私は当時全くの原始林の真只中に視察に来て最初に土地を買った人の度胸を買つて草分者の中に加えるべきと考える。

この人達は日本人としてだけではなく、実に国際植民地としての草分け者である。それを今迄表彰をせずに来ている事は誠に手落ちであつたと思う。

誰か、どういう方法で実行に移したら良いか考えて頂きたい。その時には幾許かの経費の負担はさせて頂きたいと考えている。

序に三回目の視察者として来られた、原 国次郎氏の視察旅行の様子が、北パラナの十五周年誌に書かれているが、誠に当時の様子を想像するのに適当なので転載しておきます。

……当時まだ渡伯早々の新移民であつた原氏は地理不案内の上に、言葉も通ぜず、途中 オウリニョース町へ着くまで

六〇^キ余を徒歩にて一泊、コルネリオ・プロコピオまで鉄道便で到着更に一泊。此処で乗合自動車の便を待ったがなかなか来ず、来合せた貨物自動車に便乗してジャタイに来た。其の夜一人のドイツ人と共に二十二^キを徒歩、やつと目的地（ロン・ドリーナ）に到着したのは午前の二時であった。……。

とある。

この夜中に歩いた二十二^キは全く鬱蒼たる森林の中で、おそらく一ヶ所も開いた処は無かったのであるから想像して頂きたい。それにしても森林の中の夜道はなかなか歩き難いものであるが、良い月夜であつたかも知れない。

初期移民の安住の地を求めての苦勞の一端が偲ばれる話である。

因みに、オウリーニョス・ロンドリーナ間は現在バスで二時間少しの距離でしかない。

二十五話

コルンバタイ地方視察

或る時不動産を少し売った折、割安にロンドリーナの郊外に十二、三の宅地を入金に貰った事があつたが、私は宅地には魅力が持てないので、なるべく早く農地と取替えたいと考

えてい、従つて知り合いの周旋人に宅地を入れ金に取つてくれれば、後金はお金で払うからと頼んでおいたので、一度、三度と土地の視察に行く事が有つた。

或る時、コルンバタイ河の近辺にカフェー栽培に良い森林を持つてゐる人が居るので気に入れば、宅地と取替えても良いという話が出て来て視察に行つた事があつた。セツカ（早魅）の續いていた時で、ポエーラ（土ホコリ）の激しい道であつたが、そんな事は慣れているのでなんでもなかつたが、途中の立派なカフェザール（コーヒー園）のカフェーの葉が相当にセツカにこたえて、しおれているのであつた。

『待てよ、私のファゼンダ（耕地）のカフェーもこんな工合に弱つてゐるのかな。』

と、心配を新たにして、尚、車を進めて行くと、巾十メートル程の川に新しい木造の立派な橋が架つていて、その橋を渡つたのであるが、車から川を見下すと、何んと、此の相当な川に水が流れていないのであつた。驚ろいて車を止めて川におりて見ると、処々に有る水溜りに、ランバリー（フナのような小魚）が十匹余りずつ残されている。川の両側は垂直に一メートル以上も壁になつてゐるので、普段は相当の水量が流れている事はすぐ解るのであつた。

此の地帯一般が石の多い地帯で表土が浅いから、降ればすぐ流れ出て、セツカ（早魅）が来ると早く干し上る結果であらう。

私達の見に行く土地は末だかなり遠いが、石の状態に要注意と心に止めて車を進めた。

更に二十キロ程行くと目的地に着いた。道は川辺から近い処を横断していて、そこには石は無く平らな良い土地であったが、私達が欲しいのはカフエーの育つエスピゴン（分水嶺）の高い地帯でそこが問題である。

車を降りて境界線を歩いてエスピゴンに出ようとすると、案内人が、土地内に道が有ると言うので、付いていくと、ロッテ（土地）の途中で急激に石山となったので、此れでは駄目だと言うと、上に登ると平坦なカフエー向きの良い土地が有ると言うので、嫌々ながらもどんな処が有るかと思つて見るとなる程一寸平坦な処が有り、パルミットヤシの美しいものもあるが、歩く、靴の底に時々小石の有る事が感じられるので、私達の気には入らないと断つた。

原始林の中で石の有るのが感じられる様な地帯は、開拓して四・五年もすると、ひどく石が現われて馬や機械を使わない時代でも仕事のしにくいものであつた。

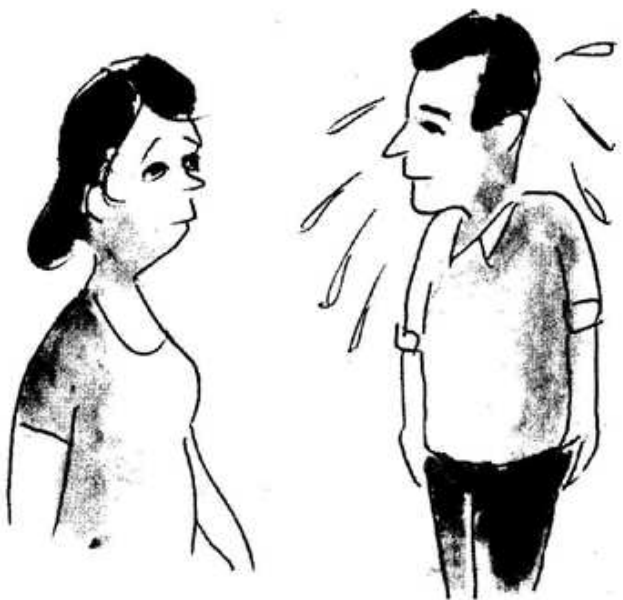
その上、此の地方の川の水の恐ろしいまでのセツカによる減水である。

あの時若し雨の後で視察に行っていたら、少しは迷つたかも知れない。それにしても怖ろしいのは、表土の浅さだ。私達の土地では、巾一メートルも無いコルゴ（小川）の水でも六〇年間かれた事が無いのに、十メートルもある川の水が涸れてしまうので、川の水をあてに。パスト（牧場）を作つても、牛馬の飲む水が無くなるのだからおそろしいものだ。そのことで、このコルンバタイ地方の視察は忘れられない思い出の一つであり、再び同地方を尋ねる事はなかった。

途中の立派なコーヒー園のカフェーの木の葉のしおれていたのもセツカ（旱魃）の為で、視察から帰って白分の耕地に行って見ると、此方は地層が深いので、同じセツカでも、それ程弱っていないので安心した。

第二十六話

娘見て心臓がとまる



此の話は書くのに一寸ためらわれたが、書かずには済まない事でもある様に思われて書く事にした。

それは私も青年会の役員として一寸使い歩きをする様になった二十才前後の或る日の事であった。

会長と二人で日本人会長の家に何かの打ち合せに伺った時の事である。犬が居ないかと気かけ乍ら、目的の家の前に近づき、「ごめん下さあい」と、声をかけると、「はあーい」と、若い女の人の返事があつて、あわてて娘さんが出て来られた。二十三、四才の愛嬌の良いニコニコとした娘さんであつた。

娘はすぐ気が付いて

「あつ、お父さんに御用ですか。」

と、言つて家の中に入つていかれた。

この僅かの瞬間に私の心臓は動悸を打ち出したのであつた。それが、どきどきどきと打つ位ならまだ良いのであるが、どつきん、どつきん、どつきんと今にも心臓が止まりそうなのであつた。

娘を見て心臓がどきを打つたのは初めての経験であつた上に、どつきんどつきんどつきんと今にも心臓の止まりそうな動悸なので我乍ら全く驚ろいたのであつたが、友だちの会長には気が付かない風なので助かった。

すぐに日本人会長の父親が出て来て、サーラに招じられて用事は何か簡単な事ですぐ終り、さっきの娘さんの持つてきたカフェーを頂いて帰宅したのであるが、考えて見ると年齢も差があり、家柄も違うので結婚相手となる人では無いのでそれ迄の事で終つてしまい、二度目は運動会で出合つたが、動悸の打つ事もなく、その内に隣りの植民地へ嫁いで行つてしまわれた。

考えて見ると、私の一生で一度の激しい動悸であつたのに

案外簡単に諦められたのは、私が薄情に出来ていたのかも知れない。

私が此の一文を公表する事には、私なりに一大決心が必要なのは、実は今の妻に対して申し訳がないからである。

今の妻を初めて見た時、それは妻が、姉と私の兄との結婚式に付いてきたのであるが、着いたばかりでまだ紹介もなく互いに知らない内に、私が表から家の中に入ろうとする、妻は、

「すみません」

と、言つて、私をよけて表へ出てきたのであつた。

『おや、どこの娘かな、小柄だが、利口そうな娘だな』

と思つたが、心臓は動悸を打たなかつたのである。

その後で一週間程滞在して色々な話し合いもしたのだが、その間も動悸を打つ様な事もなく、結婚相手としての考えも湧かなかつたのであり、一ケ年程してから、母に、「あの娘を貰つたらどうか」と言われて、初めて気が付いたのであつたから、妻には申し訳なく、此の一文を書くには気がひけたのである。

それでも金婚式を済ませた現在迄、浮気をして泣かす事もなく割合に真面目にしてきたのであるから、笑つてすませてくれるであろうと若き日の一件を書かせてもらった次第である。

第二十七話

先見の明

私は北海道の札幌の生れであるから札幌の自慢をしては申し訳無いとは思うのであるが。

明治二年一八六九年に時の政府派通の島判官が自動車を見た事もないのに、札幌市の設計及び測量をしたらしいが、各通りの広い事、又、市の南端を流れていた豊平川の水を分けて北の海に向けて直線に運河を作って、運送の便を図ったのであった。海からの物資を運ぶには、舟で運河を上る事になるのであるが、川の両側に道をあけて舟を馬で引張ったとの事であるが、運河の勾配が少ないので結構馬の力で引上げられたらしい。

此の運河を南北にあけ、東西には運河と十文字に巾百メートルの公園を造った。巾百メートルと云うのは町全体を百メートル位の角のクアルテロン（区割）に仕切ったので、クアルテロンの巾そのままを公園にしたのであった。従って公園の両側には他のクアルテロンと同じ様に広い通りがある。札幌市全体が、その道巾が、二十メートル余りの広い物である。自動車の話も無い時代に、どうして斯様に広い道の計画が考えられたのであろうか、不思議でしかたがない。

設計者島判官に深く敬意を表する次第である。

我がロンドリーナ市も、初めの市街地は十文字に区劃されている点は大変札幌市に似ていて私は好きで此の町で一生を

送る事になっているのであるが、昭和になつての計画であるのに道巾は少し狭いので、もう二、三メートル広かつたらと思う。

それでもロンドリーナは立派な計画の方である。

近いアサイに行くといつも思う事は、日本人の会社の設計なのに先ず驚くのは、何故あの石山に決定したのかという事である。石山は畠にならないからと云う話が良く聞かされるが、石山の為に初期に於ける水と下水の不便はどれ程であった事かと想像するが、想像以上の難儀な時期が有つたのではないかと思うのである。

何んとも下手な場所の選定をした町が有ると思えば、良い場所を選定しながら、まずい設計の町も有るが、広いブラジルにはとてつも無い考えを持った人も居る。

札幌市より百年も前らしいから札幌を見学したわけでも無いのに、心で相談しあつた様に、大通りに一クアルテロン（区割）を抜いたか、百メートルはある様に思える大通りを開け、他の通りもそれぞれ札幌市より広い様に思える道を持つ古い町がある。

ボリビアとの国境の町コルンバ市である。二百余年の歴史を持つこの町、人口は何程居たことであろうか。現在を見て想像すれば誠に微々たるものであつた筈であり、その上あのパンタナール（大湿原）の奥地であの設計である。私はその遺族を通じて感謝の意を表したい気持ちになる。全く “BRASILE GRANDE”（ブラジルは大きい）で、ある。

ブラジルには思いがけない人がいる。

政治にもそうした人が出て大なたを振って一大改革をして頂きたいものだ。

いや現在のフェルナンド大統領はその一人であるかも知れない。

毎日一%を越す様なインフレを、手品使いのように一晩ねて翌日起きてみたらパツタリ止っていて、早二年を過ぎた。

私は此の人には更に続投をお願いしたい。

ブラジルでは法律で大統領から州知事、市長迄再選がない。

噂さでは、長いと悪い事をするからというが、再選も選挙で決めるのであるから、悪ければ再選しなければ良いので、良い人には再選三選何期でも勤めて頂ける事にして欲しいものである。

ブラジルでもゼッリオ・バルガス大統領が十数年続いた時の国民の生活は落ち着いていたと思うし、懐かしい。当時の私たちは政治的関心が少なかったので、その成り立ちなどどうでも良く、政治が落ちついてくれればそれで良かったのである。

政治家は批判をしても一般国民は安心した生活が出来た時代であった。

大統領はゼッリオ・バルガスと子供から爺ちゃんも婆ちゃんもその名前を覚えていた、落ちついた時代であった。

此の項少し題と内容がずれてしまつてすみませんが悪しからず。お願いします。

第二十八話

自然のセルベージャ（ビール）



最近中央アメリカのマツト（森）の中をインジオ（土人）の部落を尋ねて歩いている人のビデオを見ていると、マツトの中で喉のかわいた時、インジオが、シツポ（蔓）を一メートル位に切り取って、切り口から出てくる水を飲んで見せていたのを見て思い出した事がある。

自然の中には気を付けて見ると色々と不思議と思いたい事

があるものだ。自然の太木はセツカ（旱魃）の時でも、青々と緑の葉を繁らせているものであるが、一旦切り倒すと、葉は忽ちの内にしおれて枯れていくものである事を考えると、太木のあれだけの高さの上の沢山の葉が青々と繁っているのには相当の水分が必要なのであるが、それが休みなく根から押し上げて来るのか、葉の方で吸い上げるのか、とに角梢の先々迄水分が届いて青々と葉を繁らせ、花を咲かせ、実をみのらせているのであるから不思議なものだと思う事がある。

妻が時々、「唯のこの土の中から、甘い物、辛い物、すっぱい物、にがい物、又、色とりどりの美しい花を咲かせて楽しませてくれる、土とは不思議なものだ。」と言う。若い時は、その様な事は別に気が付かなかったが、そうした感傷を持つようになってきたのは老いて来たせいではあるうが、気を付けてみればやはり不思議なものだ。

農産物の味はともかくマツト（森）の木そのものにも味があり、マルヒンや、ペローバの木は相当ににがいのので、臼を造って餅をついても、長い間にが味が出るので困っていた人がいた。

折角造り上げた臼であるから、何んとかして苦味を抜きたいものと臼に熱湯を入れて灰だとか、ソーダ等を入れて、何回か洗っている内に苦味がうすれたと喜んでいた人がいた。私の家では木の苦味は取りにくいものだと言っていたので始めから臼を造る時には木の味を調べていたので苦味のある木で造る様な事はなかった。

川にバツタリを仕掛けて米を搗いた事もあるので大きいのか
ら小さい物まで、作った臼の数では近所では多い方であつ
た。又その仕事の為に臼クリという道具を移住する時に父は
鍛冶屋さんにわざわざ作らせて持参していたのであつた。

そこで私達の臼に使った木であるが、大体グワリッターと
いう大変堅い立派な木を使った。

此の木は臼には都合のよい木であつたが、板にすると堅く
て釘が利かない上にそり返って使い物にならない。セラリヤ
(木工場) では誰も買ってくれず、畠ではやっかいもので
あつた。

ところが此の木は成長中には、その中心部に「セルベ
ージャ (ビール)」を作って持っているのである。

此の文の始めに書いた中央アメリカの土人が、シッポの水
を飲んだ様に、この木は中心部に「セルベージャ (ビール)
だあ。」と、一寸若い者を喜ばせてくれた、セルベージャよ
り更に赤味の強い水を相当に貯えているのであつた。

大変に堅い木で時々マツシヤード (マサカリ) の刃をパ
カッとかかす事があるので気を付けて切らねばならなかつ
た。又、マツシヤードで切っていて火花の出た事もあつた。
その様に堅い上に、案外太いものが多いので切り倒すのに
苦勞させられた木であつたが、一時間、或は二時間もかかっ
て中心部に近づいた頃、ドクドクツと流れ出てくる自然のセ
ルベージャを飲んだ人は何人もいる筈である。アルコール分
が何%かあつたらしいのであるが私は飲んで見なかったから

分らない。「疲れて喉のかわいた頃に出てくるのであるのセルベージャ・ナトラール（自然のビール）はうまかった。」と、話すのは、私の兄と聯合青年会の会長をしていた隣りの石川泉君であつたが、二人共既に亡くなつてしまつた。

此の自然のセルベージャについて、もう少し確かめて置けば良かったと一寸残念に思う此の頃である。

第二十九話

振るまい酒

一九四〇年代に入つて間もない頃、ロンドリーナ近郊の中央区の名家、頼則家の三男勇君がアサイのパルミッタール区に分家して行かれた。その頃その勇君の家から余り遠くない処に、私の隣りの石川家の次男清氏と四男の泉君も入植されたので、何かのついでにか、此の懐かしい三軒を尋ねた事があつた。

頼則家では中央区の土地で良い生産をあげていたので既に立派な住宅を建てて、当時としては珍らしい塗装がほどこされていたのではないかと思う。

ここで一晚お世話になつて翌朝顔洗いに裏口の井戸端に出て見ると、井戸端も裏庭もきれいに手入れされていて、気持が良い。それを見ながら、ずばらな自分の性分で我が家の状態を恥かしく思い浮べていた。

その時、親子らしい労働者が、下の方から登ってこの井戸端に來たので主人に仕事の打ち合せでもあるのかと思つてみると、井戸に屋根を葺いてある柱に小さな棚を作つてピング（焼酎）の瓶が一本とカルス（小さなコップ）が二ツ三ツ載せてあつた、そこへ行つて家の人には挨拶もなく、父親らしい人が黙つて一口飲んで、そのまま、鍬をかついで畠に向つて行くのであつた。それを見ていて私は、これは良い考えだ、朝はともかく夕方に疲れて帰つてくる時に酒の好きな人には楽しみになるだろうと思つた。

それから数年すると私の家に思わぬ幸運が舞い込んで、カフエーの一千俵収穫を目標にしていた当時一般の日系人の単位から突然に五千俵を越す生産をあげる事になつてきたのであつた。

それで先年見た頼則家のピングの件を実行する事になつた。

それでも毎朝毎晩という事は難かしいので収穫の時のもぎ落とす日ではなく、サッコ（袋）で収穫してくる日、即ち、その作業は大変な土ホコリをかぶる上に、それぞれ競争するので大変な仕事で相当に疲れるのでその日の夕方の帰り道にピングの百リットル入れの樽を置いて一口飲んでもらう事にしたのであつた。

仕事の帰りで疲れているので一口飲んでそれぞれ帰つて行くので飲んでクダを巻くとか、喧嘩をするような事もないので、安いピングで喜んでくれるなら、良かったと思つていたら、暫らくして苦情が出てきた。

パトロン（主人）が、只のピンガを飲ますので、飲まなかつた者まで飲むようになった。甚だしいのは、女たちから若い息子たちまで飲むようになって困るというのであつた。こちらは一杯のピンガで楽しませてあげようと思つても、結果が酒飲みを作っている様な事になつては何んの為に振舞っているのか分らなくなつて、これも二、三回で止めてしまった。

世の中の事、良いつもりでした事でも、結果が悪くなつたのでは善を行つた事にはならないので用心しなければならぬものだ。

第三十話

デルバ・マツト

国際植民地として北パラナ土地会社が売り出した何十萬アルケール（二アルケール＝二・四二ヘクタール）というものは全域がマツト（原始林）であつたので、購入者の殆どの方は、デルバ・マツト（原始林の伐採）の経験はされていないと思ふ。入植の年は蒔き付ける時期の関係で一部を請負わせる人も居たし、又、男手の少ない家族や大面積を持つ経済力のある人は別として、一般の五乃至十、十五アルケールの購入者は殆んどデルバ・マツトの経験があるかと思ふ。特に私の兄弟は初めが四アルケールの狭いシツチ（農地）

であつたので、三年目から、近所の人のマツトをデルーバして作らせて頂く事になった。又その内に拡張して、デルーバする事になつて一九三三年から一九五二年迄のちょうど二〇年間に、デルーバ・マツトをしない年はほとんどなかつたのであつたから、健康だつた弟らは、木を倒す事は大変上手である。

此の頃、私も古稀を過ぎ、金婚を祝い、喜寿を越す年齢になつて懐かしく昔を思い出すのである。

私も胃腸の弱い体質ではあつたが、お陰で殆んど病気で休むという事は無かつたので五十二キロの細い体ではあつたが、腰を痛めるまでは良く働いた方である？ 此の一編では、そのデルーバ・マツトが、風の為に助かったり、危険な思ひをした思ひ出を書いて置きたいと思う。

初めに隣りの石川氏兄弟の事である。

此の兄弟は初期は三人の独身と、結婚していた三男に、健在な両親という働き手の多い家族で十アルケールの土地を忽ちのうちにデルーバされてしまった。最近九十五才で亡くなつた、長男の敏氏が、鋸の目立てが上手だったので、仕事は一層捗つたのであつた。

或る日此の長男の敏君が、相当の太さの木を鋸で切つていると、次第に傾いて切り口が開いてくる筈なのに反対にしまつてきたのであつた。そんな筈はないといつても、鋸が動かなくなつてきたので仕方がない。上を見れば、風が反対の方向に吹き出して、その風の為に傾いて、反対の方向に

倒れようとしているのである。

びっくりしてその方を見ると弟の泉君が働いている。「危ない、泉！逃げろ」と叫んで知らせる。泉君は驚いて、振り向くと、早、木はバリバリツと倒れかかっていたそうである。マットの中のことで足もとが悪いから簡単に走れるものでないが、怪我はしたくないから逃げられるだけは逃げるのであるが、終いに逃げ切れず小枝の部分で、バサツと打たれたが、何の怪我もなく済んだ。泉君は枝の間から顔を上げる。兄さんは「大丈夫かー。」と叫びながら心配そうに見ている。

この場合、そこ迄は何の事もなかったのであるが、泉君が小枝の間から頭を持ち上げて、さあどうしてここから出ようかと考えていると、眼の前に、自分と同じように小枝にたたかれてびっくりした毒蛇のウルツーが、ニヨロツと、頭を出した。体は山ほどの小枝に囲われていて自由が利かない。相手は猛毒のウルツーである。然し向うも驚いていたのか、ジツとしていかかって来る気配はないようであった。がその内に下に潜ったのである。一メートル程の距離であるから、下から攻められたら、大変である。

「どうして逃げ出したか解らない程恐ろしかったぞ。」と話されたあの時の泉君の姿は忘れられない。此の泉君も元気にして居られたが先年オートバイにはねられて気の毒にも亡くなってしまった。

又、デルバ・マットで少し強い風に助けられて、一寸の間

に一日分の仕事をさせてもらつた事もある。

入植二年目の、或る日の午後であつた。かなり強い風が出て来たら、どちらに傾いている木も、パルミット椰子もみんな風下に倒れるし、風の力で半分程切れば倒れていくので仕事は大助かりであつた。父に、こんな時は木のうけ（倒れて行く方）を充分に切り込んでおかなければ危いと大変注意を受けたものであつた。この風の為に事故をおこした人も相当にいる筈である。

今振り返ってみると随分危い事をして来たものと思う。プリギツサ（なまけ）で、受けの切り込みを浅くしておいて、そこで折れる予定のものが、折れずにさけ上つて恐ろしい思いをした事も何回かあつたが。

二十年間もこの仕事をしながら、一度も怪我をせずにすんだ事は、仏の加護であつたかと、此の頃になつて喜んでゐるのである。

あとがき

此の頃” お前も必ず死ぬ、このまま死んでも良いのか……”との警告を受けて、案外に健康に恵まれて安心していた私も、八十才を目前にして、うかうかしていて後悔をしてもつまらないし、物忘れは随分と激しくなってきたが、まだ車も使えるし、書いた文章も何回か読みなおして訂正すれば、何とか人に見て頂けそうなので、もう何冊か昔話を印刷して置くべきと考えなおしてここに第三部を『毒蛇と移民』と題して印刷に廻す事に致しました。

毒蛇の玉子を、玉子やきにして子供に食べさせて驚ろいた若い母親の事などブラジルの初期移民でなければ経験できない話を書き残して置く事などは、一つの記録として価値ある様に思うし、幸いにして母親からその話を聞かされて知っていた、その本人が近所にいて当時の話を出来た事は楽しかった。

此の第三部の発刊に際して、前回同様に、牛窪氏、森ドットール、福島氏には身に余る序文で、巻頭を飾る事が出来ました事を厚く御礼申し上げます。

牛窪氏には続けてたのしいマンガの表紙や挿画を添えて頂きまして重ねて厚く御礼申し上げます。

著 者 沼 田 信 一 略 歴

- 出 生 大正八年（1918）四月十五日
北海道札幌市北二条東一丁目に生る
- 学 歴 札幌市第一高等小学校卒
- 渡 伯 昭和 8 年（1933）7 月サントス上陸、アリゾナ丸
直接海外興業株式会社開発のセッテ・バーラス植民地マン
パウロ区へ入植、翌年 5 月パラナ州ロンドリーナ市郊外中
央区へ移転、1942年フレーザ区へ移転、1950年ローランジ
ャ郡内へ移転1953年ロンドリーナ市内に移り今日に至る。
- 職 業 渡伯後一貫して農業
農業の形態： 当初はカフェー主体であったが、1970年代
半頃より、大豆、小麦に更り、1980年代半頃より、サト
ーキビ栽培に転向して今日に至る。

毒 蛇 と 移 民

発 行 1997年3月

著 者 沼 田 信 一
SHINICHI NUMATA
Rua Raposo Tavares, 828
CEP 86010-490 - Tel: (043) 322-1740
Londrina - Est. Parana Brasil

印 刷 Editora Grafica Topan-Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 S. Paulo
Tel: (011) 279-5522 FAX: 279-3975